

アルターワールドフロ
ンティア 偽りのメサイ
ア

Blood Knight FUP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらゆる世界が合併され、様々な世界の住民が過ごすワールドフロンティア。

その世界で、メサイアを中心として様々な出来事が起ころる最中、とある出来事が切つ
掛けとなり、ワールドフロンティアとは別の並行世界……「アルターワールドフロン
ティア」にて誕生した原典とは異なる青き龍の魂を宿す偽りの少女「アルターメサ
イア」の運命の歯車もまた、動き出そうとしていたのだった……

これは元ハーメルン作家の青龍騎士氏が手掛けたワールドフロンティアシリーズの
世界観を借りて製作した三次創作です。

元作者様から別の場所でメッセージのやり取りをして許可を頂いて今回この作品を制作しております。

基本 i f であり、それに伴い独自設定があつたり並行世界がメインとなつておりますのでほぼ別物と化しますがご容赦下さい。

本作の主体となるクロスオーバー作品

ファンタシースターポータブル2∞

インフィニット・ストラトス

ハイスクールD×D

仮面ライダーシリーズ

ソードアート・オンライン

アズールレーン

この素晴らしい世界に祝福を！

プリンセスコネクト

目次

P r o l o g u e						
キヤラ紹介						
page 1 偽りの語る物語	—	11	1			
page 2 偽り少女の喪失と楽園創 造の前日談	—	23	11			
page 3 偽りの少女、赤き龍の世 界へ	—	61				
page 4 偽りの少女と赤き龍の邂 逅	—	70				
page 5 偽りの少女、異世界を知 る	—	79				
page 6 紅髪の滅殺姫の葛藤と迫 り来る運命	—	90				
page 7 偽りの少女、紅髪の滅殺 姫一行と邂逅する 表	—		101			
page 7.5 偽りの少女、紅髪の 滅殺姫一行と邂逅する 裏	—			118		
page 8 偽りの少女、悪魔を知る	—				110	
		140				

Prologue

あらゆる世界が合併され、様々な世界の住民が過ごすワールドフロンティア。

その世界では事件や災害が絶え間無く起こり、それを鎮圧する守護者としてメサイア達がそれ等を解決して行き、その中で多くの敵を葬つてきた。

そんな彼等の物語が進んでいく最中……とある場所にて、一人の男が一冊の本を取り出す。

『……さあ、青き龍の物語よ。 その軌跡を象り、姿を現せ！』

その男が本を開いてそう叫ぶと、物語が綴られているページが発光し、そこから蒼い焰が飛び出し、その焰は光と共に人の形を象つていく。

やがてそれは一人の少女の姿となり、焰と光が消えた時、少女はその虚ろな瞳をゆっくりと開いた。

『……』

少女は何も語らず、佇んで男を視認する。

『クツクツクツ……クツハツハツハツハツハツ！ Happy Birthday
……今この時を以て、君は——』

男がそう言い誰とも知らぬ名を呼びかけた所で、突如視界が暗闇に包まれて意識が途絶えた。

——熱い……痛い……

目を開けて周りを見れば家全体が炎に包まれて、今にも崩れようとしていた。
そして……自分の横腹から激痛が全身を駆け巡る様に走つて自身の血で染まりきつ
ており、横腹を抑えていた掌は自身の血で真っ赤になつていた……。

私は目の前に居る——に疑問と恐怖を抱いて怯えていた。

そこに最早嘗ての彼の雰囲気等一切無く、まるで私を蔑む様に……否、ゴミでも見る
かのように冷たく鋭い目付きで私を見下ろしていた。

「どう、して……？　なん……で……こんな……」

「何でだと？ そんなの決まってるじゃないか。 お前が、存在すること自体許せないんだよ！」

「……え？」

私は——のその言葉に思考が付いていけず、数秒程固まってしまった。

彼は私の義理の兄で、互いに腕を磨き合つたり一緒に過ごしてきたのだ。

それなのに何故、この様なことを言われ、その存在を拒絶されたのか、私には微塵もその理由を理解することは叶わなかつた。

「お前さえ居なければ、俺の人生は全てが完璧だつた！ 俺がここまで恥を晒すことも、俺の夢が途絶えることも……父さん達に疎まれることも無かつたんだ！ お前が……お前が俺の人生を歪めたんだよオオオオ！」

そう言い、——は自ら顕現させた柄が青い銀色の妖しく煌めく刃を持つダブルブレードを振り上げ、叫びながら今にも真つ二つにせんと言わんばかりの勢いでその凶刃を振り下ろす。

「つ……！」

私はその振り下ろされた凶刃に斬り殺される恐怖に目を閉じ身体を強張らせて涙を溢す。

頭も混乱していてまともに働くはず、何時も習つてる回避行動も、死の恐怖と、——

に否定された絶望によつて精神が乱れてるせいで出来ず最早終わりを悟つてしまふ。

「メサイア!!」

しかし、それは後ろから聞こえてきた男の声と肉の抉られる様な音が鳴り響き、誰かが私を抱き締めるようにして庇い私はその一撃を受けなかつた。

「……あ」

「ぐうう……！ 止め……るんだ……——ツ!!」

私はその声を知つてる。この感じも……これは、私達の父バルガスであつた。

「なつ!? 父さん……なんで邪魔するんだよ!?」

「お前は……自分が何をしてるのか、分かつているのか!?」

驚いていたのは私だけでなく、——もまた父さんが私を庇つたことやここに戻つてきたことに驚いていた。

そして父さんは彼にそう問い合わせると、——はこう答えた。

「ああ分かつてるさ！ そこの泥棒女を滅ぼして全部正常に戻すつてことだろう！」

「なつ!? なんと言つことを……くつ！ お前と言う奴は、ふざけるのも大概にしろ!!」

父さんは——の返答に怒りを露にし、片手に蒼い焰を纏う。

「何!? まさか……お、俺を次元の境界へと飛ばすつもりか!?」

「ああそうだ！　お前には……失望したぞ――――！　まさかここまで落ちぶれるとはな、お前の……事など……もう知らん！」

父さんはそう言い、焰を纏う手を前にかざして―――の後ろに巨大な裂け目を生成する。

そしてその裂け目は徐々に―――を飲み込んでいく。

「う、嘘だ……止めろ！　嫌だ、なんで俺がこんな目に……やはり、お前のせいだ……！　お前さえ……居なければアアアアアアアア…………」

そうして断末魔のような叫びと私への憎悪と共に、彼は裂け目に飲まれて消えていった。

その後、裂け目が消えて私の意識が朦朧としてきた。

父さんは私に何か伝えているようだが、殆んど聞き取れない。

「おい…………イア…………かり…………ろ…………おい…………い！」

父さんが何かを叫ぶも、既に意識が途切れかけた私に届くことはなく、そのまま私の意識は途切れ、視界は真っ暗になつた。

「ん……うう……」

とある一室のベッドにて一人の少女が目を覚まし、上半身を起こす。少女の目に見える天井や部屋の風景は何時も見ているような自室で、少女は目を何度か開閉して手で軽く目を擦つた後、眠たげに起き上がって乱れた服装を整えて扉の前へと向かつた。

「またあの夢……本当になんなんだろう？」

少女は例の夢に対してもう呟き、覚束ない足取りで廊下へと赴く。

そう、少女が見たあの夢はこれが一度目ではなく、何度も繰り返し見てている夢なのであつた。

その度に少女は知らない筈の誰かを父さんと認識し、私を殺そうとする男の名前を口にする……少女からすれば、毎度あの様な夢を繰り返し見て起きるんだから目覚めが悪すぎて堪つたものではない。

そしてそんなことを考えていると、廊下を出て直ぐに足音が聞こえ、その方に視線をやつた。

すると金髪の少女が此方に駆け寄つて來た。

「おーーい！メサイアー！」

「んう……？ あ、おはようエミリア……」

「おはようつて……もうお昼だよ？ 随分眠たげだけど、昨日ちゃんと寝たの？」

エミリアは眠気全開なメサイアと呼ばれた少女に對して、心配そうにそう言う。

「うん……昨日ちゃんと寝たつもりなんだけど。」

「絶対それ寝てないでしょ！」

メサイアは意味深な感じに伝えて恨めしそうに天井を見る。

エミリアはそんなメサイアの返答にそう突つ込みを入れ、寝てないだろと疑つた。

「寝てるよ……変な夢を見るだけで。」

「夢つて……まさか、また例の夢を？」

エミリアはメサイアの寝不足の原因があの夢だと知ると、心配そうにそう聞いた。

「うん……ここ最近になって、凄くその夢を見るようになつたの。」

「なんだつて急に……なんか心当たりとか無いの？」

「ううん、今のところさっぱり分からない。」

「そつか……。」

エミリアが心当たりが無いかどうかを問うも、メサイアですら心当たりが無く、原因

は結局分からぬままであつた。

暫く沈黙が続き、暗い雰囲気が漂つていたが、流石に申し訳無いと思ったのか、メサイアがその沈黙を破るように笑顔を見せた。

「ごめんね？ なんか気を使わせちゃつて……どりあえず御飯食べよつか！ お、お腹空いたし！」

「え？ あ、あーそうね！ アタシも色々やつてたからお腹空いてきちゃつたし、行こつか！」

メサイアがそう言い元気に振る舞うと、エミリアもそう返して二人してカフェへと向かつたのだつた。

その際、メサイアが調子に乗つてエミリアの食事代を奢ろうとした結果ユートの乱入で二人分奢る羽目になつて財布が圧迫され、別の意味で死にかけたのはまた別のお話……。

ところ変わつて、その世界の上空にて複数の存在がその世界を見下ろしていた。

「アルターワールドフロンティア……か。我々の計画の最後を飾るには持つて来いの舞台だとは思わないか？」

「……はい、おっしゃる通りでございます。マスタークレリウスよ」

白い短髪に銀色に煌めく衣と軽鎧の様なモノを纏う者……クレリウスが複数の内の一人にそう問い合わせると、その人物はひれ伏してクレリウスの言葉を肯定する。

「お前もそう思うだろう？」道化師よ。」

「あー、そーでござんすね！」

「きつさまっ！ 主の問い合わせになんと無礼な！」

「気にするな。」

クレリウスが道化師にもそれを問うも、道化師は適当に流し、それを見た部下の一人が咎めるも、クレリウスはそれを制止して気にするなど付け加える。

部下は納得出来なさそうではあるもクレリウスの命と言うことで矛を収めた。

「さあ、外の世界の特異点は大体消してきた。 溢し残したのは他の奴等に任せてある

……この特異点を潰し……奪い返すのだ！ 我々の楽園を！ さあ、今こそ聖戦の刻だ！」

クレリウスのその声と同時に、部下達の雄叫びが空に轟く。

「覚悟しろよ？ メサイア……否、アルターメサイア偽りの青き龍の戦士よ。 今度はお前が全てを失う番だ……！」

そう言い、クレリウスはひつそりとメサイア……否、アルターメサイアへの憎悪を宿すのだった。

キャラ紹介

11 キャラ紹介

ガ
ー

名前	アルターメサイア
年齢	17
性別	女性
身長	166cm
スリーサイズ	B87W52H84
体重	57kg
誕生日	不明
出身	不明
能力	不明
メイン武器	ブルードラゴンブレード
好きなもの	家族 仲間 世界 努力と立ち回り 人々の笑顔 果物 ハンバー
嫌いなもの	仲間に手を出す人 無慈悲な正義 努力を貶す人 戦争 トマト
属性	火、物理、蒼（特殊属性）

種族	ヒューマン
所属	リトルウイング
職種	不明
CV	関根明良
詳細	
一人称	私
性格	基本明るく元気な女傑
リトルウイングに所属する元フリーな傭兵にして、本作の主役。	
メサイアの失敗作として創作、破棄された存在で、失敗作の理由が【勸善懲惡一筋ではない思想の差異】が主な理由とされてるらしい。	
青龍拳法等を扱うが失敗作であるが故か、殆んど我流で本家と離れているものが多	
い。	
種族は一応人間で、ここも原典とは違ひキャストにはなつてない模様。	
幼少期のからエミリアと出会う少し前までの記憶が殆んど無く、彼女に関する情報	
の殆んどが謎に包まれている。	
最近はトマト慣れしようと奮闘するも、中々克服出来ないらしい。	

13 キャラ紹介

属性	無	名前	エミリア・ミュラー
旧名		年齢	16歳
性別	女性	身長	155cm
体重	秘密	スリーサイズ	秘密
誕生日	3/12	出身	ガーディアンズの養育施設
メイン武器	ロッド	サブ武器	セイバー
好きなもの	リトルウイングの皆	嫌いなもの	角ミカ

種族 ヒューマン
所属 リトルウイング
職種 プレイバー
CV 斎藤千和

一人称 あたし

性格 大雑把な所があり、子供っぽいがやるときはやる

詳細

アルターメサイアのパートナーにして元ガーディアンズ研究員の少女。
天才的な演算能力を持つが故に運命に翻弄されるも、それを機にアルターメサイアと
出会うことになる。

旧文明人のミカをその身に宿していた過去を持ち、その縁で旧文明人の姿を見る様
になつた。

C	名前	ナギサ
V	本名	ナギサ・アーデルハイト・ハウザー
職種	年齢	18
所属	性別	女性
種族	身長	166cm
属性	スリーサイズ	B89W65H87
種族	体重	error
属性	誕生日	不明
種族	出身	不明
属性	メイン武器	スティールハーツ
属性	好きなもの	リトルウイングの皆
属性	嫌いなもの	本名で呼ばれること
属性	属性	ワイナール
職種	物理	闇
所属	デューマン	リトルウイング
種族	ハンター	リトルウイング
属性	水樹奈々	リトルウイング

口調 戦士らしい感じ

一人称 私

性格 基本的に礼儀正しいが、不器用な性格ゆえか一般常識に欠けている。

詳細

近年発生するようになつた新種族デューマンの少女。物忘れが酷い上に常識知らずの天然さんで意外と着やせする。

とある「欠片」を集めるという使命を胸にただ一人奔走する孤高の戦士で、旧文明人のワインアルをその身に宿していた過去を持つ。

現在はリトルウイングに逗留して今後について考えている模様。

名前	クレリウス
年齢	不明
性別	男性
身長	175cm

体重	不明
誕生日	不明
出身	不明
能力	不明
メイン武器	不明
好きなもの	自分達
属性	同志
種族	アルターメサイアの敵
所属	アルターメサイアを嫌うもの
職種	自身を支持する者達
CV	理想論
????	偽善者
性格	裏切者
一人称	嫌いなもの
僕 or 我	アルターメサイアとその仲間やアルターメサイアを慕う者達
C	特異点
V	残虐非道にして冷徹

詳細

世界の破壊者にして物語を混沌に陥れようと目論む者。アルターメサイアについてやけに詳しく、ピンポイントで特異点を狙う動機やその正体は謎に包まれている。

名前	メサイア
年齢	16
性別	男性
身長	168cm
体重	65kg
誕生日	1月23日
出身	ファンタシースターエリア
能力	青龍と次元龍の能力、様々な属性攻撃、回復術
メイン武器	ブルードラゴンブレード

サブ武器 ジェットホーク

仮面ライダー キバ

好きなもの 仲間、自身の世界、住民達、果物、肉、地獄の皆

嫌いなもの 侵略者、悪人、外道、トマト

属性 光、物理、魔術

種族 キヤスト

所属 ゴッドドラゴン

職種 オールラウンダー

CV 寺島拓篤

一人称 我

性格 心優しき熱血漢

詳細

ワールド・フロンティアに存在する新たに設立された組織【ゴッドドラゴン】の若き

エース。

幼い頃はヒューマンだったが、十年前にダークーの襲撃で仲間を庇つて重傷を負い、バルドルの姿に変わった。

それからマリンフォードでの海軍解体、速水のクーデター阻止の貢献、惑星ノヴァの任務もクリアするなど、実力も高い。

クレリウスとは因縁の仲であり、彼との引導を終わらせる為に立ち向かう。

本作におけるオリジナルのワールド・フロンティアの主人公。ポジションに位置する人物。

名前	兵藤一誠
年齢	16
性別	男性
身長	170cm
体重	62kg
誕生日	4月16日
出身	日本

能力	赤龍帝の籠手
メイン武器	赤龍帝の籠手
好きなもの	仲間 家族 天野夕麻
嫌いなもの	過去の自分 仲間や家族を傷付ける奴 心無い正義
属性	物理 龍 閻 炎
種族	転生魔
所属	私立駒王学園2年生
CV	梶裕貴
一人称	俺
性格	ド変態な熱血漢だった
詳細	特異点……所謂原作主人公の一人。
ド変態で女性がいれば覗き、性欲に忠実に発言する上に顔にも良く出てしまう等、割とブツ飛んだ行動をしており、謝りはすれど反省せずしばかれることが多い。	しかし、意外にも根は非常に努力家かつ生真面目な性格で愚直な優しさを併せ持つている。

天野夕麻と決別して以降、彼は……

page 1 偽りの語る物語

リトルウイングで平和を謳歌しているメサイアは、また何時ものようにカフエへと赴く。

最近は任務も特に無く羽を伸ばして安らいでいるのか、これが日課になりつつあつた。

「すみませーん！ コーヒー一つ下さい！」

「畏りました。」

私が店員にそう言つて、鼻歌を歌いながら待つていると、そこへ一人の少女が此方を見てやつて來た。

「誰かと思えばメサイアではないか。今日もここに來ていたのだな？」

「あ、おはようナギサ！ いやあ、これが日課になりつつあるもので……それでナギサはどうしてここに？」

「ああ、丁度貴女を探していてな？」

私がそう聞くと、ナギサは思い出したかのようにそう言い、向かいの席へと座つて私を見る。

「え……私を？」

「ああ、以前から貴女の事で聞きたいと思っていた事があつてな。以前は中々聞く機会が無かつたが今なら聞けると思って探していたんだ。」

「そ、そななんだ……それで、聞きたいことって？」

私は自分について聞きたいことがあることに内心驚きつつ、質問の内容をナギサに聞いた。

すると、ナギサは少し深刻そうにして口を開く。

「貴女とここで会つた当初に口にしていた、アルターと言う意味について、気になつてな。」

「つ……！」

私はそれを聞いた途端に賑やかな笑みが消え失せ、手が止まつた。

「貴女の名前にあるアルターとはなんだ？」

ナギサは直球でそう聞いてくる。

そう、私の本来の名前はメサイアではなくアルターメサイアだ。それはファミリー

ネームでも異名でもなんでもない、本当にそのままの名前なのだ。

「異なるメサイア、アルターメサイア……それが貴女だと、その時にそう言つていた。」

「それは……」

「共に戦ってきた誰もが貴女についてフリーの傭兵であること以外知らないと言うのだ。ここまで共に戦ってきた仲間であるにも関わらず、一番一緒にいたエミリアでさえ、貴女の事を殆んど知らない。」

ナギサの言う通り、私は誰かに私の事を深く語つた事は無い……と言うより、どちらかと言うと語れないと言うべきなのだ。

「そうね。私の事だけ何も知らないままってのもあれだし、折角だから少しだけ話すんだけど、なんと言つたら良いか……」

「なんだ？」

私は正直余りにも語れることが無さすぎて、話してもそこまで過去話に花が咲くわけでもない。

「本当に、知りたいの？」

「ああ、知りたいからこうして今貴女に聞いているんだ。だから勿体振らないで教えて欲しい」

「ああ、うん……そうね。分かったわ」

私はナギサに再度そう問い合わせ、何の迷いもなくそう返されてしまう。

ここまで来ては流石に語るしか無いが、せめてしんみりした空気にならないことを祈つてゆっくりと深呼吸し、口を開く。

「……私ね、フリーの傭兵をやる以前からの記憶がごつそり抜けててさ、自分の名前とその意味以外何も思い出せないんだよね。」

「なっ!?」

ナギサは私の発言に目を見開き、固まってしまう。

まあそりやそうだよ。なんせ今までそこそこの期間戦ってきた仲間が実は記憶喪失でしたーなんてなれば基本的に誰でも驚く。

仮に私が逆の立場であつても多分ナギサみたくビックリしてたと思う。

「それでね。フリーの傭兵やつてた頃の私つて、割と暗くてただ流れ作業のように仕事をしてたんだ。」

「……魔物討伐とかか?」

「それもあつたけど、昔つて結構酷い依頼も多かつたんだ。それこそ、一度だけ暗殺の仕事とかもあつたくらいにはね?」

「あ、暗殺!」

ナギサは私の口から暗殺と言う物騒なワードが出てきたことに驚愕し、開いた口が塞がらずについた。

「うん……まあ、結局失敗した挙げ句囚われの身になつちやつたんだけど。」「そ、そだつたのか。」

「うん。でもね、そこの偉い感じの人が私をどうしてだかベッドまで運んで治療してくれてさ、その後に私を引き取るって言うからもう私まで驚いちゃつてさ、そしたら本当に引き取つて貰つちやつたの。」

そう言い、私はあの頃の事を思い出すように天井を眺めた。

——それは暗い夜の某所での出来事。

私がまだフリーの傭兵だつた頃、ただひたすらに何も考えずに仕事をこなして生きていいのだけど、そんな私にも御得意様みたいな人達がいた。

基本的にその人達から仕事を受け、魔物退治や物探しをやつてている。

そんなある日、私は何時ものように仕事を受けるのだが、今回の仕事は所謂暗殺と言うモノで、とある偉い龍人を始末しろだと言う。

正直暗殺……と言うか仮にも人殺しをしたことの無い私からすれば中々に馬鹿げた任務だつたんだけど、その頃の私はまあ馬鹿で少し考えはしたが、これから的事を考えて後々こう言う任務が増える可能性も考慮し、直ぐに仕事だからと割り切つて受けてしまったのだ。

そして、その夜……遂に作戦は決行された。

「此方アルターメサイア、位置に着いたわ。」

『了解した！ 目標は恐らくその屋敷の最上階に居るだろう……何としてでも始末するんだ。良いか？ 余計なことは考えずに目標を始末することだけに専念しろ。』

「……分かつた。」

そう言つて私は御得意様御用達の無線を切り、フードを深く被つてから動き始める。正直気は乗らない……これからどういう人物であれ、見ず知らずの人間を殺さなければならぬのだ。

「……しかしなんだろう？ 誰かに見られてるような気がする。」

私はそう言い、言い知れぬような視線らしきものを感じて辺りを警戒するも、それらしき物は一切見当たらぬ。

「何もなさそうだけど、考へても仕方無い……かな？」

そう言つて切り替えた私はそのまま、屋敷へと近付く。

「今の段階で視認出来る見張りは……一人？ こんな明らかに大物が住んでそうな屋敷の外の見張りが一人つてどう言うことなの？」

私は戸惑いつつその見張りの動きを見る。

見張りはどうやら屋敷を入口付近を主に左右に移動して見張っている。

そのままスルーして入ろうと思えば入れなくも無さそうではあるが、その場合入口の鍵を見つけるか扉を破壊するかしなければならない。

……キーピックも考えはしたけど良く考えたら私暗殺とか盗人の技術とかないからそう言うのは出来ない。

つまり、見張りから鍵を奪うのが得策……な筈。

「……っ！」

「ぐはっ！」

先ず手始めに目先に映る見張りの一人を視認し、違う方へ視線を向けて歩き始めたと同時に音を立てずに接近し、うなじに軽く衝撃を与えて意識を奪う。

「……よし。先ずは一人」

そう言い、辺りを警戒しながら見張りの荷物を漁り、鍵を探す。

警備を殺さなかつた事に関しては恐らく私の殺したくないと言う本能……つまり殺

すことへの恐怖が出た結果と言うことなのだろう。

だが、彼等から言われた通りにしてるから間違いでもないと言い聞かせて気持ちを切り替えた。

「次は彼処ね。」

そう言い、私は次の見張りを遠くから視認し、その辺……と言うか至るところに飾られた骨董品らしき物を一つ掴んで近くの床へと投げ入れた。幸い相手は此方を見ておらず飛んできた方向までは分かつてないのか、その骨董品の割れる音に導かれて駆け出してくる。

「これは……一体誰が？ ガハッ！」

見張りの男がそう言い、割れた骨董品を眺めている間に背後にそつと回つて同様にうなじに衝撃を与えて気絶させた。

この二人は恐らくだが起きても直ぐには駆け付けられない筈。
そう考えながら私は奥へと進んだ。

しかし、奥へと進むにつれて違和感を覚え始めた。

「……どう言うこと? ここ割と広いのに、どうして警備が殆んど居ないの?」

そう、私が抱いた疑問とは警備が余りにも少なすぎる……否、ここまで来るとほぼ居ないのと変わり無いくらいであつた。

何かで監視されてる感じでもなく、どちらかと言うと警備が居ないと簡単に侵入される様な状態と言つても良い。

「可笑しい、場所の割に余りにも警備やセキュリティーが緩すぎる……まさか、もう気付かれてる?」

私はふと、そう考えた。

最悪な結論ではあるが、ここまで来るとそう考えてしまう程にセキュリティーの緩さが出ていた事に困惑せざるを得なかつた。

そしてそのまま、目標の居る最上階に辿り着いた。

「……」

最上階の奥の一室をひつそり眺めると、一人の男性が正座して外を眺めていた。

こんな警備が少ない中で何の警戒もせずに外を眺めている男に、私は思わず呑気だなと思つてしまつた。

「良い月夜だ。」

「……?」

すると、突然男が口を開いてそう言い始めた。

「暗い世界を照す一筋の光……或いは希望とも言うべきか。」

「……（奴は何を？）」

私が男の急な発言に戸惑つてゐることなどお構い無しに、男は言葉を紡ぎ続けた。
 「その光がどれだけちっぽけで弱いものであつたとしても、何時かは世界を照らす希望
 へと昇華し、あらゆる命を優しく包んで癒す。そして、新たな未来を……新たな時代へ
 と導くのだ！」

男は私の方になど見向きもせずに空に向けてそう熱く語る。

私は戸惑つてただただ様子を伺つていた。

「……さて、そんな光差すこの場にも奇妙な魔の手が忍び寄つてゐようだが？」
 「つ……!?」

「もう隠れる必要は無いぞ？ 警備を搔い潜つて此処へ忍び寄る段階から居るのは分
 かつてゐるからな。」

男はなんと最初から私が居ることを分かつてゐた上で先程の言葉を発してゐたと言
 う。

私は思わず声に出てしまふが、最初からバレてるなら関係無い。
 私はそつと部屋に入つて行く。

「ほう？　その手の輩で普通に入つてくるのは初めてだな。以前の奴等ならばバレたとわかつた段階で殺しに掛かるのだが……」

「生憎簡単に突つ込むと痛い目を見るなんてのは今までやつて来た魔物退治で充分理解させられてるから。」

「ほお？　魔物退治か。成る程、暗殺が主な家業かと思えば、何でも屋……つまり傭兵だな？」

男は意外そうな表情をしながらそう言い、私がフリーの傭兵であることを言い当てる。

「……」

私は何も答えず、ただじつと相手を観察する。

目を離せば何が起こるか分かったもんじやないと、本能的にそう感じさせる程に目の前に居る男の存在感と発せられた力、そしてその眼光から身体の芯まで伝わってきた。

私は思わず息を飲み、震えそうになつた身体を限界まで抑え込み、目先の男に集中させる。

「……沈黙か。まあ良い、どの道これから貴様を捕らえてその隠れた面を拝んでから色々聞けば自ずと分かることだ。」

そう言い、男は手に持つていた大剣を握り締めて私を睨む。

「勝つこと前提？　言つとくけど、簡単に殺られるつもりは無いわよ。」

「ああ、私も簡単に殺されてやるつもりはない。」

「なら……」

どちらも互いに命を譲るつもりはないと言い、構えを取つた。

ならば、互いにやることは一つだ……

「一秒でも早く……お前を倒す！」

貴様

そう言い、互いに一步を踏み込んで剣を振るい、互いの刃が鉄と鉄の音がぶつかり合つて火花が散り、鍔競り合いが始まつた。

私は、相手の恐ろしい程の腕力に圧されそうになるも、引くこと無く全力で押し込み、前へと一步踏み込む。

「ほう？　少しはやるじゃないか。　ただの傭兵としては勿体無いな。」

男は楽しげにそう言い、私の押し込みに対し余裕の態度で押し返そうと更に力を込めた。

「ぐつ……！　まだ本気じやないって思つてたけど、キツいわね！」

「当たり前だ、殺しもしない暗殺者相手に本気など出すわけないだろう？　出して欲しければ、私に本気を出させて見せろ。」

「つ……上等よ、その余裕崩してやるわ！」

そう言い、私は剣で相手の押し込みを受け流すように反らして男は隙を晒してよろめいてる内に袈裟斬りをしようとする。

「先ずは一手ツ！」

「甘いな？」

「……え？」

私が袈裟斬りを決めようとすると、よろめいて隙を晒していた筈の男が片腕から武器を手放して私の腕を打ち上げるようにして私の攻撃を防いでそのまま、もう片方の手で床へと落ち行く武器をキヤツチし、そのまま振り上げる様に私の身体を切り裂いた。

「ツ！　がふつ……！」

私は余りの痛みに声すら上げられず、そのまま吐血し痙攣した後、そのまま仰向けに倒れてしまう。

その攻撃は己の身体に深々と入つたせいか、意識が朦朧として感覚も消えてきた。

ああ、私はここで死ぬのか……長生きしちゃつた割には、呆気ない最期だなあ。

「……」

男は私を見て驚いてる様子で何か言つてゐるみたいだけどもう何を言つてらのかすら聞こえないせいで分からず、そのまま意識が途切れた。

「……」
そして暫くして私が目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。

私は、ボーッとした頭で何故自分が生きてるのかを考え始める。

あの時、確かに私は胴体を深く切り裂かれて絶命した筈だ。

勝ちを確信し、切り裂こうと剣を振るつた筈が、気付けば私が隙を晒して切り裂かれて死ぬ筈だつた。

なのに、何故私はベッドの上で眠つているのだろうと考えてみると、部屋の扉が開かれた。

「おお、目が覚めたか。」

「……アンタは。」

部屋に入ってきたのは、あの時に斬り合いをしていた男だつた。

「具合はどうだ？」

「……特には。」

私は念のため警戒しながらそう答える。

しかし、あの時の様な圧や殺気は感じ取れず、少し戸惑つてしまふ。

「そうかそうか！ どうやら秘薬が良く効いたようだな？」

男は嬉しそうにそう言い、満面の笑みを浮かべて料理の乗つたトレーを横にあるデスクに置いた。

私は男の意図が掴めずに困惑してしまふ。何故暗殺しに来た相手にこんなことをするのか理解できなかつたのだ。

「腹が減つてるだろ？ これを食べておくと良い。」

「……どうして。」

「どうして、とな？」

私はその行動が理解出来ず、ついそう言つてしまふ。

男は私の発言の意図に気付いてないのか首を傾げる。

「私はアンタを殺しに来たんだよ？ なのに、治療して料理まで出して……何でなの？」

「…………」

私がそう問い合わせると、男は黙つて真顔になる。

暫くして、男が口を開いた。

「少し、戦友の子供を思い出してな?」

「子供……?」

「ああ、その子はな? ある事件が原因で行方不明になつたんだ。」

そう言い、男から語られた内容によると、どうやら戦友である男の子供が二人居て二人と母親が行方不明になり、その戦友は死亡したと言うものであつた。

その事件もどうやら豪邸の火事が主な原因とされてるらしい。

「その子とは何度か会つてるんだが、どうにも今の君と似ているんだ。」

「つまり、その子供かどうか判断するために生かすつてこと?」

「それもあるが、単純に君に興味が湧いているんだ。暗殺しに来たのに警備を一人も殺さず來た事とかね?」

「それは……?」

私はそう返されて言葉を濁してしまう。

当然だが、普通に考えたら暗殺しに來た人間が警備を一人も殺さずに氣絶させ主犯だけ始末しようだなんて正直かなり異常ではある。まあ、私的に言えば出来るだけ殺し

はしたくなかった……ただそれだけだから深い意味なんて特に無い……筈。

「……それより、何を聞こうって言うの？」

「そうだな……バルガスと言う名前に聞き覚えはあるか？」

「バル……ガス？」

「そうだ。」

私はバルガスと言う名前を頼りになけなしの記憶を振り絞つて遡る。

しかし、当然出てくる記憶はほぼ魔物狩りをしてるところだけでそう言つた名前は覚えていなかつた。

ただ、どうしてだかその名前に懐かしさを覚えている自分もいた。

「分から……ない。」

「……じゃあ、デイードと言う名前に聞き覚えは？」

「デイード……？　いや、無い……わね。」

私はデイードと言う名前を聞いた途端に、何故か悪寒が走つて震えてしまつた。

先程のバルガスと言う名を聞いた時と違い、背筋が凍つたような恐怖心を覚えてしまうのだ。

男は恐らくある程度私の反応を見て何かあるとは思つてるものの、確証は無さそうであつた。

「そうか、ならそうだな……とりあえず君の名前を聞いておきたい。」

「名前？ 私は、アルター……メサイア。」

男はそう言い、私の名前を聞いてきたので、まあ名前くらいならと私は普通に答えた。すると、先程まで賑やかな表情だった男は電撃が走ったかの様なモノへと変わり、目を見開いていた。

「あ、ああ……」

「ど、どうしたの？ そんな顔して……」

「そうか、やはりそうだつたか。」

男はそう言うと震え出し、良く見ると涙を流していた。

「な、なんで泣いて……」

「いや、何……嬉しくてな？」

「う、嬉しい？」

「ああ、会いたいと思っていた者に会えた喜びとでも言うのだろうな？」

「わ、訳が分からない。」

男は泣きながら私の問いにそう返し、私は男の泣く理由が理解出来ずそう口にした。実際私からすれば殺しに向かつた相手に会えて嬉しさの余り泣いてると言つてるようなのだ。

ここだけ見れば恐らく余りにも訳の分からぬ事を言つてゐるなんて言われて当然な程異様な状況だとと言えよう。

しかしこれは序の口であり、この後に男は更なる爆弾発言をしたのだ。

「なあ、これから行く宛はあるか？」

突然男は私にそんなことを聞いてきた。

「え？ ああ、多分組織には切り捨てられてると思うよ？」

そう言い無線を繋ごうとするも、向こうと繋がらなくなつており、組織に見捨てられたことが分かる。

「これからどうするんだ？」

「任務も失敗したし……手間を掛けないよう大人しく自害するわ。」

「……それはならぬな？」

そう言い、私の腕を掴む。

その手にはかなり力が入つてゐるのか、正直掴まれた腕から激痛が走る程であった。

「つ……楽に自害されるより処刑して惨たらしく殺す方がお好み？ 余り痛い死に方は御免と言いたいけれど、捕まつた私に拒否権は無いわ。」

そう言い、目を瞑る。

せめて。何も見ずに終わらうと本能的な死への恐怖を少しでも和らげる為に。

せめてこれぐらいは許して欲しい。死への恐怖なんて割と誰にでもあるものなんだから……。

「安心しろ、殺しはせん。」

「……奴隸にでもするのかしら？」

「そんなことせん。と言ふか発想がひねくれすぎだろう？」

「そう？」

「自覚が無いのか……うーむ、ならこうしようか！」

そう言い、男は席を立つて私に手を差し出す。

「な、何……その手？」

「君、宛が無いならここで住み込みで働いてくれぬか？」

「…………は？」

私は最早男の言うことが理解出来ず、開いた口が塞がらなかつた。

一体彼は何を言つてゐるのか、私には理解が出来なかつた。

そして私がそう言うより先に、男は口を開いてこう言う。

「なんどと言いたげだが、君はもう私や周りを殺さない。そう確信した上で今こうし

て君にそう言つてるんだ。」

「そんな確信なんて何処に……」

「あるさ。君は、昔から優しい娘だつたからね。」

男はそう言い、懐かしんでもるような感じにも見えた。

「……どう言うこと？」

「いや、此方の話さ。兎に角、君は私が引き取る！」

「だから私は……」

「諦めるな……己自身を、己の人生を！」

「つ……もう、好きにして。」

私は真剣な眼差しでそう言い男に呆れ返りつつ、最早考えることを放棄して男の提案に乗つたのだつた。

「ああ、懐かしいなあ……余り良い思い出と言うべきかは置いとくとして。」

「なんと言ふか、今の貴女からは想像出来ないな……」

私は思い出に浸る様にそう言い、ナギサはそんな私を見て今の私では想像出来ない様な過去だと言われた。

まあ、人生何が起くるか分からないうつてことだよね。

「まあ、その後は色々あつてエミリアとレリクスで会つた感じかな？」

「な、成る程。まさか貴女にもこう言う話があるとは……続きを是非とも聞きたいとこではあるが……」

「き、聞いても楽しくないよ？ ほら、楽しい話で盛り上がりたいし、ずっとしんみりしてばっかりじやああれだし……ね？」

そう言い、私は必死にはぐらかして話の話題を変えていく。

ナギサも渋々ながら別の話題に乗り、そこに仕事終わりで来たエミリアも混ざつて夜になるまでこのリトルウイングでのこれまでの思い出話に花を咲かせていた。

そして、夜中の一室にて……

「……」

エミリア達と解散した私はベッドでうつ伏せになりながらあの続きを少しだけ思い出し、シーツを掴む手に自然と力が入り震えていた。

「……どうして、私だつたんだろう。」

ふと、震える声でそう言葉を溢す。

先程まで明るかつた彼女の面影は無く、ただただ消え入りそうなまでに弱々しく震えていた。

幸い他の人には聞かれておらず、防音もそれなりに利いてるのでこんな姿を聞かれた
り見られる心配もない。

「……本当に、私は生きていて良いのかな。」

そうして絞り出したその問いは、誰にも届かず消えて静寂が暗い自室を支配する。

彼女が思い出した記憶の最後……それは、あの頃の自身を変えてくれた人達が、とある人物によつて全員殺されてしまつた、悪夢の様な重苦しい現実だつたのだ。

「もう、分かんないよ……」

そう言つてそつと涙を流し、気が付けば眠つてしまつていたのだつた……

……私を見つめる視線に気付かぬまま。

page 2 偽り少女の喪失と楽園創造の前日談

泣き疲れて眠つてしまつたアルターメサイアこと私は、そのまま数時間程時間が経過した後に目を覚ました。

「ん……うう……ん……」

目を開けて起き上гарと、部屋は暗いままでシーツも手で握り締めてたせいか、少しシワが寄つていた。

私は寝る前のことを思い出し、また気持ちが暗くなつた。

「そつか……私、また……」

私は俯き、完全に思い出してこの今の状況を察して胸に握り拳を作つた手を当てた。

「すう……はあ……よし！」

私は狂おしい程のこの感情を落ち着かせ、深呼吸をして気持ちをゆつくりと切り替えていく。

気にならないわけではないが、流石にエミリア達にこんな情けないとこを見せるわけにもいかないと言うのと、やはり要らぬ心配を掛けさせるのも頂けないからである。

そうして部屋を出ようとした私は、ふと何かを感じ取つて後ろを向く。

「……今、誰か居た？」

そう言い辺りを見回すが気配も何時もの視線も感じず、気のせいかと思つて部屋を後にした。

その後、私はエントランスに着いた段階で久々にクラウチさんから呼び出しを受けたとエミリアから聞き、二人でリトルウイニングの事務所へと向かつた。

「唐突に事務所に呼び出すなんて、どうしたんだろう？」
「うーん……私もさっぱり分からないわ。　ただ、少しだけ胸騒ぎがするのよね。」
「……胸騒ぎ？」

私はエミリアが不安げに口にしたその一言に首を傾げ、そう聞き返した。

「うん……ちょっと説明はしづらいんだけど、なんと言うかすごく嫌な感じがするの

よ。」

「そ、 そ う な ん だ ……」

私は、エミリアのその言い知れぬ何かへの恐怖心の様なものを感じ、不安になつてき
た。

そして私達そのまま事務所へと辿り着き、入つていく。

事務所の中は昔と変わらず、強いて変わつたことがあるとすれば社長がクラウチさん
になつたこと。

そして――

「おっ！ やつと来たかお前等、おせえぞ。」

「おやおや、コレが彼の噂の……」

見知らぬ男性が事務所内……それもクラウチさんの隣に居たことだろう。

「……えーっと、初め……まして？」

私は首を傾げながら、その男性に向けてそう言う。

しかし出た言葉とは裏腹に、私は何処と無くこの男に違和感を覚えていた。

ただ、それがどう言えば良いものなのかは違和感を感じてる私ですら分からない。

「初めましてですね。私はクレリウスと申します……以後、お見知り置きを。」

「あたしはエミリア、エミリア・パーシバル。」

「私は、アルターメサイア。」

そう言いはクレリウスと名乗る男性の挨拶混じりに自己紹介をし、その後に私達も自己紹介をした。

「アルターメサイア……ですか。 随分変わつたお名前で」

少しして、クレリウスさんはそう言つて不思議そうに私を見る。

まあこんな名前的人は早々いないだろうし、可笑しくもないのだけども。

「あ、あはは……自分でもなんでこんな名前なのか正直余り分かつてなくて……呼びづ
らいならメサイアでも構いませんよ。」

「いや、ご心配には及びません。 それに素敵な名前じやないですか。」

「そ、そうです……か？」

「ええ、とても……貴女にこそ相応しい名前だ。」

クレリウスさんは笑みを浮かべ此方を見つめ、そう返す。

その時のクレリウスさんのその眼を見た私は、一瞬だけ背筋が凍つたような感覚に至つた。

「つ……」

「どうしました？ 随分顔色が悪そうですが……」

「つ！ いえ、何でもないです。それより、今回の御用件を聞きたいのですが……」

私は、クレリウスさんの言葉で我に返つて話題を戻すと、クレリウスさんはそうでしたと思い出したかのように微笑んで本題へと切り出した。

「実は、今日の夜にウチで大規模な実験を行うのですが……どうやら最近やたら会社や組織の施設に潜り込んで無差別に物資強奪や破壊行為を行う輩がいるらしくてですねえ。最近で言うなら色々ありますが、例えるなら以前にG.R.M.社で強盗事件があつたと言う話も出ていますしねえ？」

「ツ！」

クレリウスさんのその一言で、私とエミリアは目を見開き驚愕していた。

彼の言うG.R.M.社で起きた強盗事件とは、正しく私達がナギサと初めて出会つたあの

時の出来事なのだから。

恐らくその強盗と言うのも、ナギサがダークファルスの欠片を回収した時のことを探してるのである。

「G R M社で、強盗って……」

「ま、待つて！ それつてもしかしなくても……」

「あー、いえね？ そこまで詳しくは把握していないのですが、まあ何か最近研究対象となる物が盗まれた程度のお話だった筈ですが……もしかして、既にご存知でした？」

それを聞いた私達は開いた口が塞がらなかつた。

最近でその手のことが起きたのはあの一件のみで、それ以降は起きてなかつたからである。

と言つても、もしかしたら私達の知らないところでもまたそう言うのが起きたなんて言うのもあり得るし、万が一クレリウスさんが元々 G R M社の社員だつたなんてことでもあればまだ分からなくもない。

「あー……いえ、多分勘違いだと思うので気にしないで下さい。それで、クレリウスさんの言い分を聞くに恐らくですが実験する際の護衛をして欲しいと言いたいんですよ？」

「おお、話が早くて助かります！ そうなんですよ、一応護衛は雇つたり他のとこからも

要請したりはしているのですが何分不安ですから……是非とも貴女方にお力添えをして欲しいと思いまして、どうかお願ひします。」

そう言い、クレリウスさんは頭を下げる。

「それだけ大事なことなんですね？」寧ろ私達で良いんでしようか？」

「いえいえ、リトルウイングの皆様が護衛に居るだけでも我々としては心強いのです。

どうか、お願ひ致します！」

クレリウスさんは顔を上げ、そう言うと私の手を握つてきた。

「……分かりました。その依頼、引き受けます。」

「決まりだな？」

「つ……ありがとうございます！」

とは言え、ここにいる全員がこの依頼を断る理由なんてあるわけでもないので満場一致で引き受けることになった。

こうして依頼を受けた私達は一度それぞれの部屋へと戻り、明日に向けて準備をし始めた。

今回はクレリウスさんもこのリトルウイニングに一日だけ泊まるらしい。

……のだが、私だけは準備の前にどうしても確認したいことがあり、ビジフォンを開いてとある人物に送るメールを打ち込んでいた。

「ヒュー・ガさんならきっと何か知ってる筈。」

そう言い、私は文字を打ち込んでいく。

そしてある程度文字を入れると、確認画面に移つてメールを送信した。

「……ふう。」

そうして送り終えた私は一息ついて明日の準備に向けて支度をしようとすると、ビジフォンからメールの着信音が鳴る。

「……え？　早すぎない？」

私は余りの返信の早さに驚きつつ、準備を一旦止めて再びビジフォンで受信ボックスを確認すると、一通の無題と言うタイトルのメールが来ることに気付いた。

「これ、ヒューガさんのはじやなくて……エミリア？」

送信者がヒューガさんではなくエミリアであることを知り、急いで開くと……

「……逃げてつて、どういう事？」

そう、その内容にはただ、逃げてとだけ記されていた。

それがどういう意図で、何のために送られたかは分からぬ。

でも、何か嫌な予感がした私は即座にエミリアの部屋に行くべく入口に向かおうとした。

「……やあ？ 失敗作！」

しかし、その声が聞こえたと同時に私は相手の正体を察知するよりも早く、黒く濁つたような青いエネルギー状の触手に縛れ、そのまま取り込まれてしまう。

「ツ！ うぐつ……がつ……あ……」

その内部からは、どす黒く濁つたような怨嗟の声のような悲鳴が聞こえ、とても冷たく全身に不快感を覚えるほどに血生臭い異臭が漂つていた。

呼吸も録に出来ず、徐々に意識が朦朧としてくる。

「さて、何か探りを入れようとしていたみたいだが……まあ良い。 お前には先に行つて貰うとしよう。 僕の計画の……」

「あ…………エミ…………リ…………ア…………」

そう言いかけたところで、私の意識は途切れだ。

所変わつて駒王町のある場所にて、一人の少年がいた。

その少年は制服を身に纏い、一部が壊れて無くなつてゐるブレスレットを片手に握り締めていた。

「特異点は、軸となる世界に唯一多大な影響を与えることの出来る特別な存在。」「……特異点？」

「そう、君もその一人つて訳だが……変えてみないか？ こんな非道な現実を。」「何言つてやがる？ んなことしても夕麻ちゃんは帰つてこねえよ。」

少年は男に対して皮肉げに笑つてそう返した。

その目に光など無く、絶望と諦めに満ちていた。

「そんなこと無いさ。なんせ君は特異点だ……君はこの今の状況を変えるだけの可能性を秘めている。」

「……詳しく聞かせろ。」

「ハツハツハツハツ……詳しく述べ必要なんて無い。君の思うがままのやり方でやれば良い。例えるなら、彼女のいる現実^{現実}を創る……とかね。」

男は少年に対し、笑みを浮かべて皮肉げにそう返した。

「樂園……か。」

「さあ、お前の願いは……結論はなんだ？」

そう言い、男はとあるドライバーと白いプログラズキーを少年に手渡す。

「俺は……」

そう言い震える手でキーとドライバーを手にした少年は俯き、目を閉じて少ししたら

顔を上げ、その心に決意を宿して閉じた目を開いた。

「この世界を滅ぼし……」

『エデン・ドライバー！』

少年はドライバーを腹にあてがいベルトが自動で伸縮して腰に巻かれる。

そして白いキーを持ち上げるように構え、そのスイッチを押し込むと、その禍々しい

プログラライズキーからどす黒い紫電と禍々しいオーラが発生し、腰に巻かれたベルトのユニットを覆うようにしてユニットの形状を変化させた。

「……樂園を創造する！」

『EDEN!』

そしてその後にそう言葉を紡いで、ドライバーと共に変化したキーのスイッチを再度押して、禍々しい音声と共にドライバーにそれを装填する。

「クツクツクツクツクツ……」

男は変身した少年を見て妖しげに微笑む。

「……」

『Imagine::Ideal::Illusion::』

『EDEN the KAMEN RIDER!』

そしてその少年は、こうして仮面ライダーエデンへと変身した。

「君の夢、叶うと良いな？」

そう言い男は姿を消し、その場に居るのは少年だけとなつた。

「待つてくれよ？ 夕麻ちゃん……君の住める、楽園を……居場所を……創るから。」

そう言い、少年は……兵藤一誠はその場を後にして夜の闇へと消えていった。

page 3 偽りの少女、赤き龍の世界へ

夕日が沈み、暗くなつていく空の遙か彼方から駒王町を眺める一人の男がいた。

「ああ、予定通りあの失敗作は駒王町に飛ばしておいた。お前達はこのまま特異点の元へ向かえ。」

『承知しました、必ずや成功へと導きましょう！』

「ああ、お前の働きには期待しているぞ？」

男は手に持つてある小型の円盤から映し出されたホロビジョンに向けてそう話していた。

そのホロビジョンに映し出されたのは白い制服の上にマントを着けた若い男で、その男は了承して頭を下げる。そのまま円盤の電源を切り、それと同時にホロビジョンが消えた。

「さて、兵藤一誠。お前の身勝手さが生んだ業の数々……その命を以て清算して貰うぞ？あれだけのことをしておいて全肯定され、あまつさえヒロインを守る資格があると思つたら……大間違いだ！」

男は、謎の用語を織り交ぜつつ怒りを顕にすると、その場から消え去つていったの

だつた。

ところ変わつて、嘗てレイナーレが隠れ家として利用していた廃教会に一人の少年
……兵藤一誠が訪れていた。

「もし、夕麻ちゃんと楽園で再び巡り会つた時、君は……何て言うだろうか？」

俺は何処か悲しげに俯きながら椅子に腰掛け、小さくそうばやいて天井へと視線を移す。

もしかしたら、責められるかもしないし……もしかしたら拒絶されるかもしない
と、そんな考えが俺の脳裏を過る。

「どうしても、君にはその資格があつて……俺にはそれを受け止める責任がある。」

俺は内心で夕麻ちゃんに責められ拒絶されてしまうが、これは心を理解しなかつた俺が受けるべきモノで……決して無視してはならぬモノだからと、拳を握り締めて決意を固めて居ると、外からものすごい程の轟音が響く。

「な、なんだ!?

俺は直ぐ様外へと出て様子を確かめたのだが、真上の空から其なりに大きい裂け目の様なものが開き、そこから人が落ちるように出でてきた。

「あれは、人……なのか? つてそれよりも、このままじゃ不味い!」

俺が裂け目から出てきた者を視認し、人であると気付いた頃には頭から地面へと落ち始めており、このまま行けば先ず助からないと直感で理解した俺は反射的に動いて起きてきた人を何とか俺がスライディングして下敷きになることで最悪は免れた。

「ぐつ……!? クツソいてえ……だが、何とかなったみたいだな。」

結構勢い良く落ちてたから下敷きになつた俺は其なりにその衝撃が痛みとなつて来てしまうが、落ちていた人がぐちゃぐちやになつてしまふことを思えば遙かにマシだと思ひ寧ろ安堵した。

「……流石にこのまま捨て置くのも縁起が悪いし、とりあえず教会に運ぶか。」

俺はとりあえず落ちて来た人を担いで廃教会へと入つていき、何処か寝かせられそうな横長い椅子にその子を寝かせて放置された布を身体に掛けておいた。

改めて寝かせてから確認したが、落ちてきたのはどうやら中高生位の蒼い髪の少女だった。

「にしても、なんだつて空から落ちてきたんだ？ それにあの裂け目に關しても見たことも聞いたこともない……まさかこれも彼奴等の仕業つてか？」

そう言い俺は、確認のために彼奴等の居る場所へと赴いた。

ところ変わつて、一誠の居なくなつた教会内に寝かされたメサイアは一誠が立ち去つてから数分後に目を覚ました。

「……う、うう……ん？」

目を開ければ唐突に見知らぬ暗い教会の中に寝転がつていた私は、戸惑いを隠せずにいた。

意識を失う前、クレリウスと言う人物について調べて貰おうとして……それでエミリアから逃げてつてメツセージ受信して、それからエミリアの部屋に行こうとして捕まつて、気付いたら今この状況に至ると言つた感じだ。

「……は……？」

私は辺りを見渡してここが何処かを把握しようとするが、辺りの物や建物の構造的に教会だつた場所と云うことしか分からず、現在地が掴めそうに無かつた。

「とにかく、早くエミリアの元に行かないとうつ！」

そう言い私は身体を起_レそうとするが、激痛に見舞われて寝転がっていた椅子から転げ落ちてしまう。

「い、痛つ……な、なん……で……？」

そう、何故か全身……特に背中辺りからとてつもない程激痛が走つたのだ。

感覚的に言えば、何処かに思い切り衝突した時のような感じと似ていた。

こんな見知らぬ場所に一体誰が……いや、なんとなく推測は出来る。

だけど推測が出来たとして、肝心な確証や根拠が余りにも無さすぎるしましてや動機

なんかも分からぬのにここで結論を出してしまうのは早計と言うものだろう。

「にしても、本当に此処は何処なんだろう？」

私は周囲を改めて見渡し此処が何処かを再度調べようとするも、やはりこれだけで場

所を把握する程の情報がある筈もなく、痛みに悲鳴を上げる身体に鞭打つて何とか立ち上がり、私は覚束無い足取りで出口と思わしき場所へと向かつた。

「よし、鍵は開いてるみたいね？」 とりあえず此処出て場所だけでも把握しておかなきや……」

そう言い、私は扉をそつと開けて外へと出た。

「な、なに……これ……？」

そこで待ち受けていたのは、本当に何処かも分からぬ風景で、私は色々な意味で絶句せざるを得なかつた。

この言葉にしようがない感じは一体何なのか？ 不安に駆られた私は所持している武器を粗方呼び出してみた。

「……まあ、これが使えるだけでもまだマシってとこね。 流石に素手だけだと厳しいし。」

その結果、呼び出せたのがフォトン系統の力を唯一使わないブルードラゴンブレード

のみだつた。

当然他の武器に関しては扱うことは愚か、呼び出すことすら叶わなかつた。

「でも、どうしてこれしか呼べないんだろう？ この惑星つて……いやそもそもまだ惑星と断定は出来ないけど、にしたつてこれは可笑しい。」

私は安堵する一方で、他の武器が一切呼び出せないことに不安や疑念を抱いてしまう。

だつてそもそもこんなことは一度も無かつた。

亜空間内にしろ聖棺内であつても今までなら他の武器を呼び出したりすることは出来たのだ。

それが突然見知らぬ場所に連れられた挙げ句、武器も殆ど使えないともなれば不安にだつてなるだろう。

ブルードラゴンブレードは確かにずつと扱つてきた謂わば相棒みたいなもので、信用性は高いかもしれない。

ただ、それがイコールで安心かと言えば決してそうではないのだ。

それにこうなると恐らくだけど、今まで使つていたフォトンアーツなんかも使えなくなつているだろう。

武器を呼び出すことすら出来ないんだ、それも想定はしておくべきかもしけない。

「……ハアア！」

ただ、まだ断定はしていないので試しに適当にフォトンアーツをやってみた。何時もなら刃から発せられる光が、今は発せられる事すらなく刃を振るう音だけが虚しく響く。

「……やつぱりダメかあ。」

しかし、結果はやはり使えなかつた……本当にどうなつてゐるよ此処。そう言い私は、ブルードラゴンブレードを消して辺りを散策しようと一歩を踏み出そ

「おい、何処へ行く氣だ？」

「……ツ!?

後ろから聞こえてきた声を聞き、私は思わず足を止め振り返ってしまう。
そうして振り返った先には、ボロボロのマントの下に制服らしきものを着込んでる少年の姿があつたのだつた。

page 4 偽りの少女と赤き龍の邂逅

「おい、何処へ行く気だ？」

「……ッ!?」

メサイアが教会を出てある程度自身の状態を確かめた後、その場を後にしようとし
て、一人の少年に後ろから声を掛けられ、メサイアは反射的に振り返つて声の主が誰な
のかを確めた。

すると、視線の先にボロボロのマントの下に制服らしきものを着込んでる少年が仁王
立ちをして此方を睨むように見ていたのだつた。

遡ること数分前……

「誠は少女を寝かせた後に、裂け目のこと居るとある者達に聞こうと降りていた。」

「おい、ドーナシーク。教会の上空に妙な裂け目が出来ていたが……お前の仕業か？」
「ふむ、裂け目か……見に覚えがないな。」

そして俺は地下へと降りた後に直ぐ近くに居た紺色のコートの大男……ドーナシーケに裂け目について問い合わせる。

しかし、ドーナシーケの奴は見に覚えがないと首を横に振る。
「本当か？」

「つ……我々墮天使に裂け目とやらの力は持ち合わせて無いのだよ。」

俺が軽く殺気を込めてドスの利いた声でドーナシーケにそう聞いたが、奴の答えが変わることは無かつた。

「しかし、先程の轟音はその裂け目とやらが原因と言うことか。」

「ああ、そこから人が落ちてきた。」

「む？ 裂け目から人間が？」

ドーナシーケは俺のその発言を聞いて自身の耳を疑ったのか表情が少し険しくなる。

「そうだ。まあ。間一髪俺が下敷きになつたから助かつてはいるがあの状態じやあ起きても直ぐには立てんだろうさ。」

「成る程、目覚めたら尋問をすると言うことか。」

「尋問じやねえよ、人聞きの悪い。」

「クツクツクツクツ……これは失敬。」

俺がそう言うと、ドーナシークは尋問するために寝かせたのかとかほざきやがつたのでとりあえず尋問じやないとだけ言つてその場を後にした。

この際楽園を創る邪魔さえしなければなんだつて良いと内心で割り切つて先程の場所へと戻つたのだが……。

「あ？　なんで居なくなつてやがるんだ？」

俺は先程寝させていた少女が居なくなつてる事に気付く。

「どう言うことだ？　俺が地下へと行つてる間の時間がそこまで長かつた訳でも無い筈……いや今はそんなこと考えてる場合じやねえな。もしあの少女が悪魔や天界に属してゐる奴なら此処をバラされて楽園創造処じやなくなつちまう！」

幾ら部長達に存在を悟られぬ用にとあの墮天使から貰つたモノを着けてるとは言え、
そうなれば確実に部長が皆を引き連れ動き始めてしまう。

俺は急いで祭壇に置いてあるボロボロのマントを制服の上から着て外へと出た。
しかし、外に出るとあの少女が今まさに何処かへ行こうとしているではないかと、意
外と近くに居たことに安堵して俺はその場から仁王立ちをして少女にこう聞く。

「おい、何処へ行く気だ？」

「……ッ!?」

少女は俺の問い掛けを聞いた途端に振り返つて此方を視認した。

それなりに反射神經はありそうだなど考えていると、少女は警戒しながら此方の様子
を伺つていた。

助けたのにんな警戒すんな……と言いたいところだが、まあ相手は気を失つてる状態で
落ちてたんだ。

助けたことは愚かもしかしたら落ちてたことにすら気付いてない可能性だつてあり
得るんだからここはまだ言わないで置こう。

「貴方、誰なの……？」

「誰……か。俺は一誠……兵藤一誠だ。」

俺は名前を普通に名乗る。どうやらこいつは部長達と関連性が無さそうだしな。

「兵藤さん……ですね。ここは何処なんですか？」

「ここは、嘗て教会だった場所であり、今の俺の隠れ家みたいなもんだ。」

「教会だった場所ですか。ここつて自然が割と多いのですが、惑星パルムなんでしょうか？」

「……は？」

この教会付近の話をしたのかと思つてそう答えたが、返ってきた言葉を聞いた俺は空いた口が塞がらずに呆けた声を出してしまう。

「あれ？ えつと……何か変なことを言つてしまつたでしようか？」

「……あ、ああ、惑星なんて言葉が唐突に飛び出して驚いただけだ。」

少女は俺の反応に対し戸惑いながらそう聞いてくる。

正直俺としては当たり前だと言いたい所なんだが、悪魔やら墮天使やら……はたまたドラゴンとかそう言つたファンタジーを煮詰めた様な者達を見たり自分が悪魔でドライグを宿してゐるなんてここまで起きてるせいか、今更感があつてそうは言えなかつた。

驚いたのも言つてしまえば、その発言の規模が有り得ない程大きかつたからだし……なんなら夕麻ちゃんの為に楽園を創ろうなんて言つてる俺ですら大概ヤバいからな、普通の奴からすれば。

俺だつてヤバいことくらい自覚はしてる。

「んで、惑星パルク……だつけ？」

「あつ、惑星パルムですね。」

「あーそれそれ。まあ結論から言えば此処はそんな良くわからん惑星じやなくて普通に地球つて呼ばれてる所なんだよな。」

「……チキュウ？」

そして俺が結論として此処は地球だと大雑把に答えると、少女は難しい顔をして首を傾げる。

いや、マジかよ……地球つて単語でそんな反応されるのは流石に想定外過ぎる。

「えーっと、そのチキュウつてキヤストとか居るんですか？」

「キヤスト？ 何言つてるか良くわからねえけど人間が多く存在してると思うぜ？」

「人間が多く……完全に未開の地かあ。」

ある程度の質問をした少女は、そのまま項垂れて頭を抱える。

……これは、今までの発言からして恐らく別のどこから来てしまった迷子か何かなのだろう。

普通ならあり得ないと思うが大概俺の住んでるこの場所ですらあり得ないと言えることが多発してる事実がある以上、この可能性だつて決して否定出来ない。

「とは言え、野放しにして部長や皆に捕まつたりして俺の居場所を悟られるのは非常に

宜しくないしな……仕方ねえ！」

俺は腹を括り、少女の方に視線をやる。

「とりあえず、色々探ろうと思うのでこれで……あ、情報提供ありがとうございました。」

そう言つて少女はその場を後にしようとする。

だが、後にされては困るので先回りして道を阻んだ。

「まあ待て、ここら辺詳しくないだろ？ その様子からして持ち合せもなさそうだし

……」

「も、持ち合せならあります！ ほら！」

そう言い、少女は何やら小銭らしきモノを少し取り出す。

「いや、何これオモチャ？」

「はあ!? れつきとしたお金です！ メセタです!!」

「いやなんだよメセタつてここ円高だぞ？」

「え？ エンダカつて何？」

少女に対してもうと、少女は目を点にして固まってしまう。

……こいつ反応豊富すぎやしないか？ つてそれどころじゃねえよ円高すら知らねえのか!? なんだろう、いよいよ本格的にほつとけなくなってきた。

多分常識知らずのレベルならアーシアより遥かに酷いぞこれ。

あ、いや別にアーシアのこと悪く言うつもりはないけどさ？ うん……ごめんなアーシア？

俺は内心でアーシアに謝罪しながら、少女に近寄る。

「おい、お前名前は？」

「え？ ああ、名乗り損ねてましたね。 私は……えーっと、うーん……アルターメサイアです。」

「いや名乗るのにすらそんな躊躇うことあるか？」

俺はなんかもう色々と可笑しすぎる……いや、アルターメサイアを見て頭が痛くなってきた。

「その……こんな名前、普通に変でしようし……」

「いや、変わった名前だけど馬鹿にするつもりなんざねえよ。」

「ほ、本当？」

「ああ、ただずつとフルネームなのもあれだろし略したいとは思う。」

キラキラネームって奴なんだろうが略せば特に思はうとこもない。

「あ、ならメサイアで構いませんよ！ 兵藤さん。」

「そうか、ならそう呼ばせて貰うぜ？ メサイア。」

そう言い俺は少女の……メサイアの手を引いて教会へと引き返す。

「え、えっと……どちらに?」

「教会だよ。お前に此処の常識つて言うべきか分からんけど、ある程度は俺が教えてやる」

「ほ、本當ですか!?」

「ああ、お前ほつとくと何仕出かすか分かつたもんじやないしな。」
俺はそう言つて、メサイアを連れて祭壇へと向かつたのだつた。

page 5 偽りの少女、異世界を知る

誰も立ち寄らぬ廃教会のその祭壇にて、メサイアこと私は兵藤一誠と言う名前の男性からこの世界について様々な事を教えて貰つていた。

「……つまり此処は地球つて惑星で、此処の付近の街が駒王町なんですね？」

私が確認するようにそう聞くと、彼は頷いてそだだと返した。

軽く彼から聞いた話を纏めると……どうやら私は別世界に飛んだらしく、地球と言う惑星の中にある駒王町の付近の教会だった場所に現在居るらしい。

それで此処での通貨が円……私達で言うとこのメセタらしく、私の持つてるメセタがただのお荷物になつてしまつていて尚且つこの駒王町には何やら墮天使やら悪魔やらまたとんでもないのがうじやうじや居るらしく、地下にいる協力者も墮天使らしい。

「……私が言うのもあれですけど、中々ブツ飛んだ惑星ですね？」

「お前の世界の方がよっぽど飛んでるぞ。」

「それを言われたら余り言い返せないです……」

私は兵藤さんの鋭いツツコミにぐうの音も出なかつた。

正直フオトンとかダークファルスとかキャストなんてものこの惑星……と言うか世

界とはある意味無縁に等しいからなあ……まあその分墮天使とか天使、おまけに悪魔とか居るからこれはこれで私達とは別の方でブツ飛んでると言えるだろう。

「少し前の俺なら多分、興奮しながら聞いてたよ。」

「少し前の？　えっとそれって……」

「俺のことは別に良いだろう？　それより、俺は少し席を外す。　お前は此処に居ろ……右も左も分からんのに街に出たら何仕出かすか分かつたもんじやないしな。」

少し奇妙な言い回しをしてたことに疑念を抱いた私がそう聞こうとすると、彼は話を終わらせ何処かへ行こうとしていた。

と言うか何仕出かすか分かつたもんじやないって失敬な。　私はそんなに馬鹿では……いや右も左も分らない以上他からすれば馬鹿になりかねないのか。　うん納得……したくないけど納得せざるを得ないわねこれは。

「まあ、そこまで遅くはならねえよ。」

「あ、えつと……行つてらっしゃい？」

「……」

兵藤さんはそう言うと、私の言葉に少しだけ足を止めて此方へ視線を向けるも、その後も何も言わずにそのまま教会から出ていつてしまつた。

このまま黙つて此処にいるわけにもいかないが、今の私にはどうすることも出来ない

……いや、出来ることはあるにはあるが下手に動こうものなら何が起こっても不思議ではないと言うべきなのだろう。

「とりあえず、ここで待つかな？」

そう言い、その辺にある横長い椅子に座つて帰りを待つことにする。

「ほう？ 貴様が兵藤一誠の言つていた人間か。」「へ？」

しかし、それは祭壇から聞こえてきた声によつて阻止されてしまった。

私が祭壇の方へと視線をやると、そこには何時から居たのか、紺色のコートを着て奇妙な翼を持つ男が此方を興味深そうに見ていた。

「だ、誰……？」

「ふむ、見たところ悪魔でも天使でもなさそうだな？　どうやら本当に人間の様だな。」「えっと、何を言つて……」

そう言い掛けた刹那……何を思ったのか、その男が光の槍を生成して構えを取る。

それを見た途端、私は一気に警戒心を高めて男の殺気を感じ取り、呼び出したブルー

ドラゴンブレードを持つ手から汗が滲み出る。

「ツ!?」

「ほう……変わった剣を持つていいな？」

すると、男は私の持つブルードラゴンブレードを見てそう言つた。

「青き龍の力を宿した剣よ！」

「青き龍だと？　ふむ、成る程……どうやら貴様が偽りの青き龍の戦士の様だな。」

「……え？」

私の答えに返ってきた言葉は、私の思考を止めるには充分過ぎるものだつた。
その言葉を聞いたと同時に私は身体の動きを止め、目を見開いた。

この世界は互いの世界とは異なる場所で互いのことを認識すらしてなかつた世界だ。

その筈なのに、どうして目の前の男は私のことを知つていると言うのだろうか？
何も分からぬ……そんな言い知れぬ恐怖が背を這い、重くのし掛かる。

「ツ!?　なん……で、それを……？」

「その反応……どうやら彼の言葉に嘘偽りは無かつたようだな？」

そして男は、私のこの反応を見て確信したように笑みを浮かべ、翼を用いて空へと舞う。

「つ…………！」

「さあ、偽りの青き龍よ。 その力……この私に見せて貰おうか！」

そう言うと、ドーナシークが光の槍を勢い良く投げてきて、私はそれを既の所で避け、そのまま接近しようとしたのだが……

「遅い！」

「くつ…………速い!?」

相手は既に光の槍を生成しており、逆に一気に距離を詰められ怒濤の猛攻を繰り出してきた。

私はその槍を用いた連撃を剣で往なして相手の動作を観察するが、往なすので精一杯で細かくは見ることが叶わなかつた。

「どうした？ 防いでばかりでは勝てぬぞ？」

「まだまだ、これからよ！」

「ならば見せてみると良い！」

そう言うと男は槍を両手で掴むと、引きちぎるように広げて光の球体にして手に纏わ

せ、そのまま瞬間移動のような挙動で黒い羽根を散らしながら私のすぐ近くまで飛び、そのまま球体を私に向けその光の欠片を放ちながら旋回し始めた。

すると球体から放たれた光の欠片が、槍を形成して私に降り注ぎ、私は囮うように降り注ぐ槍を剣で弾いていく。

「何処を見ている!？」

「なつ!？」

しかし最後の槍を防いだ直後、背後から男の声が聞こえてきてそのまま男は逆袈裟斬りの要領で槍を振るう。

「ぐつ!!」

「ほう？　今に対応するか……」

私はそれをギリギリのところで剣で防いで金属の弾かれる音が響く中、何とか斬られずに済んだが微塵も安心出来ない。

しかし、この槍自体フォトンのようにエネルギーで構成されることもあり、私の警戒心を極限まで高めてくれているのもあるだろう……あんなのまともに喰らえばただでは済まないと、そう直感で分かつてしまうのだ。

それに一撃一撃がかなり重く、それを何度も防ぐとなると正直かなり厳しかった。

「受けよ、我が光の槍を！」

すると、今度は槍を逆に持ちそれを思い切り投げてきた。

先程よりも更に速度が上がつており、とてもじやないが避けるしかないと悟った私は横に飛ぶが、余りの速さに片腕を掠めてしまう。

「ハアアアアアア!!」

「くっ！ 何時までもやられっぱじやないわよ!!」

そして外したと同時に急接近してきた男に私はその刃を振るい、廻払うようにして斬て残つた。

しかしその瞬間、男は斬られること無く消え、その場に羽根だけが宙を舞うようにして残つた。

「何!? ハツ!?

「貫つたぞ!?

「ぐうつ!」

私は後ろから感じた殺氣で男が投げた槍を掴んで私を刺し貫かんとしてるのを察知して私は往なす様に槍の刺突を防ぐ。

「何!?」

「歯あ食い縛んなさい！ 青龍……天翔拳ツ!!」

「な、なんだそれは……ぐはつ!?」

そして私は、剣で槍を弾き飛ばして拳に蒼炎を纏わせ、思い切り飛び上がるよう アツパークットを決めた。

それと同時に、龍の形状を象つた蒼炎のエネルギーがアツパーと共に真下から発生して男を飲み込み、上空へと連れ去るように飛翔する。

「まだ終わりじゃないわよ!?」

「ああ、お互いにな!?」

男が上空へと飛ばされる最中、私は飛び上がって男の真上まで来た。
すると、男は負けじと槍を光の球体にしてそこから小さめの光の小刃を幾つも飛ばしてきた。

しかし、私はそれを纏つていた蒼炎のエネルギーで凧払うように脚で払い、そのまま

片足を上に振り上げ、そのまま落ちる。

「青龍……落焰脚ッ!!」

「おのれ……ぐおおおおお!?」

そして私は踵落としを決めて地面まで落下し地面に衝突すると同時に、蒼炎が集中して集まり真下が爆発した。

「……逃した。」

「ああ、かなり危なかつたがな?」

「つ！ その割に全然余裕ありそうね？」

私は、声が聞こえた方へ反射的に振り向き身構える。

そこには多少の傷はあれど、拍手をしながら余裕の笑みを浮かべる男が立つており、

その返答に皮肉げに返すが、男は気にも止めずに言葉を紡ぐ。

「人間にしては中々骨があつたと言つておこう。」

「人間にしては……ねえ？ やつぱり貴方は人外つてことなのね？」

「その通り、我が名はドーナシーク！ 見ての通り、墮天使だ。」

その言葉を聞いた私は息を飲む。

兵藤さんに言う墮天使とはこのドーナシークと言う男のことなのかと、漸く理解した
……と言うよりかは理解させられたと言うべきか。

フォトンも無しに奇妙な翼に光の槍を生成する……ドーナシークが人外だと言うの
なら嫌でも説明が付くだろう。

「一つ良いかな？」

「何かな？」

そして私は、ドーナシークに先程から抱いていた疑念をぶつけることにし、あることを聞く。

「どうして私のことを知ってるの？ この世界と私達の世界は接点が無い筈なのに。」

「ああ、そんなことなら答えは単純だ。この世界に貴様を知る人間が来た……ただそれだけのことよ。」

「なっ!?」

私は衝撃的過ぎたその言葉に戦慄した。

兵藤さんは私との接点は無かつたようだが、どうやらこの堕天使には何かしらの接点があつたようだつた。

「私を知つてゐる人間……まさか、エミリア？　いや、そんな筈は……」

私がそう考へてゐると、ふとドーナシークが口を開き言葉を紡いだ。

「そのエミリアと言うのが誰なのかも知らぬが、そいつは確かに……クレリウスと名乗つていたな？」

「……クレリウス!?」

「ああ、恐らくもう此處には居ないだろうがな？」

その名前を聞いた私は目を見開き戦慄する中、ドーナシークは何処かへ歩き始める。

「……私に襲い掛かつたのもクレリウスつて奴の差し金なのかしら？」

「ククク……忌々しそうに語るあの男の言う貴様がどれ程のモノか確かめたくなつただけだ。」

「そ、そんな理由で!?」

「ククク……そう熱くなるな？ だがまあ、一応警告はしておこう……あの男には関わらない方が身の為だとな？」

そしてその言葉を最後にドーナシークは何処かへと消えてしまった。

「な、なんだつたの？」

私は去つていったドーナシークに困惑にも近い感情を抱いていたが、それ以上にクレウスと言う人物が一番気掛かりであった。

クレリウスと言えば、此處で目覚める少し前にリトルウイングで出会つた男性がそうだ。

思えば、あの禍々しい何かが私を飲み込んだ際に聞こえてきた声も何処と無くそいつに似ていた。

本件と何か関わりがあるのか？ 仮にあつたとして、何が目的なのか？

考えれば考える程分からないことや疑問が増え続けていく。

「……クレリウス、一体何者なの？」

私のその問い掛けは、誰にも聞かれること無く誰もいない教会内の静寂に溶けて消えたのだった。

page 6 紅髪の滅殺姫の葛藤と迫り来る運命

駒王町に存在する私立駒王学園……その、旧校舎にあるオカルト研究部の部室にて、赤髪の女性……リアス・グレモリーが焦燥した様子でソファーに腰掛けていた。

「一誠……本当に、何処に行つてしまつたの？」

リアスの口から溢れたのは、不安に駆り立てられた者の様な……そんな不安気な声だつた。

「彼が行方を眩ませてからもう1ヶ月経つたけど、未だ手がかりの一つすら掴めていないわ。」

リアスのその問いに答えた隣にいるポニー・テールの女性……姫島朱乃是紅茶を淹れてテーブルに置く。

しかしながら、朱乃のその表現も何処か暗く悲しげなのが分かる。

あの墮天使達との一件以来、一誠は行方を眩ませてしまい、それからもう1ヶ月は経過しているのだ。

アーシアも転生悪魔ではあるけどしつかりと生きていて祐斗や子猫も学校や悪魔としての活動の合間を縫つて捜索していたが、朱乃の言う通り未だ手がかりの一つすら掴

めなかつた。

例の廃教会も見に行つたりもしたがやはりその時には気配なんて微塵もなく見つかることは無かつた。

天野夕麻の生前での行動も思い返して調べたが、データスポットを回つても結果はご覧の有り様……更に言えばその間にライザー・フェニックスとのある一件も絡み始め、それも相まつて流石のリアスも焦りを覚えていた。

「朱乃、今日の夜にもう一度だけあの教会へ向かうわ。 小猫達にも伝えておいて頂戴。」

「ええ、三人が戻り次第その様に伝えておくわ。」

リアスは朱乃にそう伝えると、立ち上がり足早に部室を後にする。

朱乃は敢えて何も聞かずにそつと目を伏せ、リアスの心情を察して、ティーカップを手に取り窓から空を眺めた。

今リアスは明らかに精神にかなりの負担を掛けてしまつていた。

一誠が行方不明になつて1ヶ月経過した今でも見付からず、その間にもライザー・フェニックスとの婚約の話が自分の意思を半ば無視する形で進められてるのだから当然と言えば当然なのだが、リアスとしても精神的に限界が近かつたのだ。

「何事もなければ良いのだけど……」

朱乃のその不安に満ちた言葉は、誰にも届かずに消えたのだつた。

ところ変わつて、教会で一人一誠の帰りを待つてゐるメサイアは、彼の指示通りに教会で待機していた。

「墮天使に襲われて正直此処から抜け出したいけど、彼の言つてたことも間違つてない以上下手に動けないし……はてさて、どうしたものかな。」

私はあのドーナシークと名乗つた墮天使に何故か襲われ、なんとか撃退……で良いのか分からぬいけど追い返すことが出来てそのまま長椅子にまた座つていた。

本音を言うなら今すぐ抜け出して帰りたいところだけど、元の場所への帰り道とか分

からない上に此処を出たら未知の世界……知識も無しに下手に出れば何が起ころか分かつたもんじやないからそう言うわけにも行かないが、何もしなければ変わることもない。

「……ホントにどうしてこうなったのか、これが分からない。

「……最悪、此処を出るべきかな。」

そうばやいてると、教会の扉が開かれて兵藤さんが帰ってきた。

「戻つたぞ……つて、おいなんでこんなに荒れてる？」

「え？ あー……実は、ちょっと堕天使って人に襲われまして……」

「堕天使だと!? どんな奴だ？ 名前は？」

私がそう返すと、兵藤さんは表情を険しくしてそう問い合わせてくる。

「えっと、確かドーナシークって名前だった筈ですが……知り合いでですか？」

「知り合いもなにも、協力者だ。 つたく、ふざけた真似を！」

そう言うと、苛立ちを隠さぬまま地下へと向かおうとするが足を止めて再び私を見る。

「そうだ……一応釘を刺すようで悪いが、俺達のことは他の奴等には他言無用で頼む。

一応、この町の管理者とは過去に関わりがあつて顔を知られてるんだが、居場所がバレると少しばかり不都合なんだ。」

「え？ それって、どういう……」

「……元眷属さ、今の俺は恐らくははぐれ悪魔のなんだろうがな。」

「ツ！ もしや、貴方は？」

兵藤さんはそう言うと、私が言葉を紡ぐ前に兵藤さんはそのまま地下へと去つていく。

「そうか、彼もまた悪魔だつたのか……全く気付かなかつた。いや、この場合分からなかつたと言うべきだらうか？」

「それにしても、はぐれ悪魔か。なんだか……凄く悲しそうだつた気がする。」

私は一瞬だけ見せた兵藤さんの悲し気な瞳の方が脳裏に過り、どうにかしてあげられないかと思つてしまふが、同時に現状でどうにも出来ないと理解させられてしまう。

それもそつだろう……確かに彼が何かを抱えて苦しんでることは理解出来たんだらうが、逆に言えばまだそれしか分かつていないので。

下手なことをして傷口を広げてしまう可能性だつてあるかもしれない。

「とは言え、このまま何もせずに世話になり続けるのも忍びないなあ……」

私はそう言い、天井へと視線を移す。

正直、彼には此処に来てから世話になつてばかりだつた。

落下からの救出やこの世界の事を教えてくれたり、こうして寝床……で良いのか分か

らないけど居させて貰つたりと、私も出来る限りの恩返しぐらいしておきたいのだが、
私に何が出来るのだろうかと、ふと考えた。

「……直接言つてみる？」

私はそう言い、善は急げと言わんばかりに兵藤さんの向かつた地下へと足を運び、彼
の元へと歩いていった。

そう言えば、ここの中地下に降りるのって初めてだっけ……

そして地下へと降りると、何やら話し声が聞こえてきた。

そこにいるのかと声を辿り、その場所まで足を進めると誰かが話をしていた。

一人は声的に兵藤さんだがもう一人が誰か分からなかつた。

「……何か話してる？」

私は兵藤さんが誰かと何かを話しているのを聞き、一旦向かうのを止めて聞き耳を立て
た。

『一誠様、準備はほぼ完了致しました！』

『そうか、この調子なら明日には始められそうだな。』

『はい！ これで遂に我々の楽園が実現出来ますね。』

『我々の……か。 そうだな?』

兵藤さんと誰かは知らないが青年のような若々しい声が聞こえてくる。

途中楽園とか準備とか聞こえたが、私には何のことかまるで意味が分からなかつた。

「樂園か……どう言う意味なんだろう?」

私はもう少し、話を聞こうと聞き耳を立てようとしたのだが、その瞬間誰かに頭を掴まれてしまう。

「あぐつ!?

そしてそのまま引っ張り出され、視線の先には私の頭を掴む兵藤さんと、白い制服の上にマントを着けた若い男がいた。

「誰かと思えば、お前か……」

「……お前は!?

兵藤さんは呆れ気味に、隣の人は目を見開いて何やら驚いた様子でそう言い、私の頭を掴んでた手を離してくれた。

「えつと、兵藤さんに話があつて来たんですけど……なんか話してたみたいで気になつて……その、聞き耳立ててました……」

とりあえずまずは正直に話そようと考えた私は、そう言い正座の体勢になる。

「あーえつと、正座しなくても良いから、何処まで聞いてたかだけ答えてくれ。」

「えーっと確か、楽園がどうとかって……」「他には？」

私が質問に答えると、兵藤さんは声色を低くして更にそう聞いてくるが、物凄い圧力に思わず息を飲んでしまう。

「あ、後は準備がどうとか……位ですね。」

「そうか。 とりあえずその話はお前には何の関係も無い事だから黙つて忘れろ……良いな?」

「は、はい……」

私はそう言い、首を縦に振る。

「ところで、俺に用があるとか言つてたが……どうしたんだ?」

「あ、えつと……何か出来ることは無いかなーなんて……あ、いやまあたつた今盗み聞きしといて言うのも可笑しいかもしねないんですが。」

「なんだそんなことか。 気持ちは有り難いが、精々俺達の事を口外せず黙つてくれりやそれで良いよ。」

兵藤さんはバツサリとそう切り捨て、そのままその場を後にした。
もう一人の男も、そのまま兵藤さんに付いていつて居なくなり、一人取り残されてし
まう。

「黙っているだけ……か。」

結局特にこれと言つたことも聞けず、暫くしてそのまま地下室を後にして教会へと戻つたのだつた。

「こゝろ変わつて、地下室を後にした一誠にふと、隣にいる部下であるオルガがあることを聞いた。

「何故あの女を始末しなかつたんです？」

「ん？ なんだ急に？」

俺はオルガの問いに首を傾げた。

流石に助けた奴を大したことでも聞かれてないのに殺さないのかつて言われりや誰だつてそうなるもんだろ。

「あの女を生かした理由はなんですか？ 私には到底信用ならぬ輩でしかないと思いますが……しかもそれで盗み聞きまでするなど最早間者である可能性も捨て切れませんし消すべきでは？」

「構わないよ。 大したこと聞かれてないし……彼奴に樂園創造の計画は理解出来ない。」

「本当に、それだけですか？」

「……疑ってるのか？」

オルガの疑念に満ちた目を見て、俺はそう問い合わせる。

別に対しても無いんだがな……。

「はい、生かす理由がそれだけとは思えません。 何がある筈です！」

「大した理由じやないさ。 ただ、彼奴を俺達の都合に巻き込みたくないなかつた……それだけの事だ。」

俺はそう言い、フードを目深く被つて外へ通ずる扉を開く。

「お前は最後の準備を進めろ、明日には計画を実行に移す！」

「……承知致しました。」

俺はオルガにそう伝えて、俺はそのまま天野夕麻と初めて出会ったあの場所へと向かつた。

オルガのその不満に満ちた様子に気付かずに……

page 7 偽りの少女、紅髪の滅殺姫一行と邂逅する 表

一誠から自分達の事を黙つてくれればそれで良いと言われたメサイアは、自分が始めに眠つていた椅子へと座り、これからどうするかを一人考え続けていた。

「何か分かるかもとは思つたけど、進展は未だ無し……流石に此処だけでの情報収集はもう厳しいわね。」

そう言い、外へと通ずる扉を見つめ、一誠から街に出たら何仕出かすか分かつたもんじやないと言われた事を思い出す。

「……いや、やつぱり出よう。このまま此処に留まつても何も知れない」

それがエミリアの安否に対する焦りなのか、それとも早く帰りたい事への焦りなのかは分からぬ……しかし、ドーナシークの言葉がもし本当ならクレリウスが今回の件に絡んでる可能性があり、エミリアだけでなくクラウチさんやユーマ達にも危害が及ぶ可能性もある。

ずっと留まつて怯えても変わらないのも事実だと、決意を固めた私は立ち上がりて教會を出た。

扉の先には自然が広がり、辺りは暗くなつていた……恐らく時間帶的に夜なのだろう。

月明かりが照らされ、少しだけ明るさはあるもののそこ以外は真つ暗で見えないくらいだつた。

「綺麗……つて、こんなことしてる場合でもないわね。」

思わず月を見て立ち止まりそうになつてしまふが、目的を思い出して我に返つた私は、そのまま兵藤さんから聞いたであろう駒王町へと向かおうとする。

勿論色々教えて貰つたとは言え、完全に安全とも言えないでの警戒は必要だけどこれ以上留まつて無知のままいるのは御免だ。

何かを知るために自ら飛び込むしかない……そう考えていざ駒王町へ向かわんと足を進めて離れ始めたところで、突然後ろから何か妙な力を感じ取り、反射的に振り返つた。

「ッ!?　な、何が起きてるの……!」

唐突の出来事に反応が遅れてしまい、気付いた頃にはそこに魔方陣の様なモノが浮かび上がり、そこから眩い光と共に数人のシルエットが出現した。

私は腕で光を視界を遮り、その光は暫くして止むとその数人の姿が見えた。

赤い長髪の女性とポニー・テールの黒髪の女性の他に、白髪の少女と金髪の青年と少女

らしき人物がキヨロキヨロと辺りを見渡し、その内の一人が此方を捉える。

「部長！ 誰かいます！」

「あー……えつとお、どちら……様？」

金髪の青年の発言に全員が此方を見る……やはりと言うべきか警戒心MAXで此方を睨んでいた。

私は複数人に見付かり、気まずそうにそう問い合わせてみる。

「貴女こそ、こんな時間に此処で何をしてるのかしら？」

赤髪の女性がそつとそう問い合わせてくる。

言葉こそ至つて普通だがその鋭い眼光と言い知れぬ圧力に息を飲む。

この人と言うか、周りの人もそうだけど絶対ただ者じやない……直感でそう察して此方も警戒心を抱きつつ問われた質問に答え始める。

「私は気付いたら此処の中で眠つてて、暫くどうするか悩んだ末に此処を出ようとしてました。」

私は粗方自分がしたことを話した……勿論嘘は言つてない。

「そう……貴女、名前は？」

「私はメサイア……アルターメサイア。」

「あ、アルター……メサイア？」

そう答えると赤髪の女性は少しだけ戸惑つて目を細め、私は私で案の定な反応に苦笑いしてしまう。

「ゴホンッ！　じゃあ、アルターメサイアさん？　ここで茶髪の男の子を見掛けなかつたかしら？　貴女と同い年位の子で、名前は兵藤一誠つて言うんだけど……」

「兵藤……一誠？　いや、知らない名前ですね。」

私はその名前を聞いて、内心戦慄していた。

それは教会で私を介抱してくれたあの人の名前だつたと言うのもあるが、その名前がまさか此処で出てくるとは思わなかつたからである。

正直に言うべきか悩みそうになつたが、兵藤さんの言葉を思い出して直ぐに首を軽く横に振つて知らないと答える。

「そう……」

少しだけ残念そうにしてるのを見て安堵しそうになつたが、次の瞬間彼女等から異様な殺氣を感じた。

「貴女、何か知つてるわね？」

「ツ!?　な、何も知りませんって！」

「あらそう？　まあ、どちらにしても身柄は拘束させて貰うわよ？　貴女から何か異様な力を感じるから。」

そう言うと、全員の背中からドーナシークとは異なる黒い羽が生えた。

どうやら目の前にいる全員人間ではない様だ。

「また、墮天使？ さつき関わって録なことにならなかつたし、関わりたくないから逃げる！」

そう言い全速力で走つて逃げようとしたが、その直後に金髪の青年があり得ない程のスピードで追い抜いて逃げ道を遮つてきた。

「うえ？ は、速つ！？」

「悪いけど、大人しくしてくれないかな？ 出来れば戦いたくはないんだ。」

爽やかで優しげにそう言うが何時出したのか、青年のその手には剣が握られていて、既に臨戦態勢に入つてた。

抵抗しようモノなら即座に斬り伏せるつもりなのだろう。

あのスピードなら恐らくだが、一瞬の隙が命取りになりかねない。

「その割にやる気満々じゃない？」

「そうかな？ これでも警戒してるだけなんだけどね。」

「そう？ 私も出来ればアンタ達とは戦いたくはないわ。」

私と青年はそんな軽口を叩くが、実際は互いに僅かな動作や相手の特徴を読み合つていた。

先程のスピードや剣を扱うところ、この隙の無い構えと彼自身から発せられる眼光……明らかに手練れであつた。

「なら大人しく……」

「でもね。」

確かに手練れではある……だけど、それは捕まる理由になんてなり得ない。

私はとりあえず逃げることを断念してブルードラゴンブレードを呼び出し、その手に握り締める。

「それで簡単に降伏する程、私は甘くないわよ？」

「ツ!? どうか、君も剣を扱うんだね？」

「ええ、我流ではあるけど……剣術を一応身に付けてるの。」

そう言い、頬に流れた汗と共に笑みを浮かべて構えた。

相手ももう逃げる選択を捨てたと理解して完全に戦闘態勢に入る。

此処まで来たらもう逃げることなんて出来ない……負かすか負かされるかのみ。

「いざ、勝負!!」

互いにそう言つて同時に踏み込むが、相手の方が遥かに速い。

やつぱり速度では勝てない……なら!

「はあああ！」

「ぐつ！」

私は相手の斬撃を予測してそこに剣を構え、見事初動の一手を防いだ。

「今のを防いだ!?」

「てやああ!!」

「つ！」

そして私も相手の剣をいなすように弾いてそのまま横に一閃するが相手の方が速く、その一手を避けられてしまつた。

「良いスピードだね？」

「アンタの方が数倍も速いっての！」

「それはどうも！……なら、今度はこれだ！」

そう言うと、相手は一直線に飛び込んで距離を詰めてきた。

直進による一閃かと察した私は、瞬間的に相手の打ち込みに合わせて剣を構えて一撃を防ぎ切る。

「ぐつ！」

「まだだよ？」

そう言うと、防いだ反動で後ろに一步下がつたと同時に相手は既に次の一手に出でおり、何時の間にか真横を取られていた。

「しまつ……ぐうう！」

速すぎて何時移動したのかも見えない程だった。

あの打ち込みから次の一手までの切り替えの速さはもう、尋常ではなかつた。

急いで対処しようとするが、焦りから体勢が上手く整えられずにその斬り込みをギリギリ剣で受けて体勢を崩されて僅かながら隙を晒してしまう。

私は後ろに跳んで避けてから体勢を整えようとした。

「貰つた！」

「があつ！？ ぐつ……ああああああああああ！！」

しかし相手はその隙を突いて背後を取り、逆袈裟斬りを繰り出す。

斬られた背中から灼熱のような激痛が駆け巡り、傷口から鮮血が舞う。

私も負けじと剣で後ろに一回転して薙ぎ払うも、即座に距離を取られて空振ってしまう。

「ぐうつ…………痛い…………じゃない。」

「背中を斬られて痛いで済むとは思えないけどね。」

「生憎と、魔物退治でそれなりにこう言う経験はしてるからね。 まだセーフライン よ。」

相手の突っ込みに私は笑い飛ばすようにそう啖呵を切り、再び構える。

しかし正直な話をするなら、魔物退治の頃でこのレベルの負傷は普通に痛手でしかない。

ましてや爪や牙と違ひ剣で斬られた為に、その深さで言えば魔物退治の際の負傷よりも酷いものと言えよう。

まあ、爪や牙の場合だと毒とか雑菌とかの問題があるだけね。
「魔物退治？」 良く分からぬけど、それなりの場数は踏んでるみたいだね。 なら、これはどうかな?」

そう言うと、相手は辺りを動き回り始めて攪乱させようとする。

「つ……ホントに速すぎるわね！ 益々人間味が薄くなつてくるわよ、その速度！」
なんとか目で追おうとするが、それでも追い付かない。

「だつたら……」

「そこ、貰った！」

そう言い掛けたところで、相手は死角から狙いを定めて急接近し、そのまま横薙で斬り伏せようとする。

「斬る瞬間の風向と殺氣で予測するまでよ!!」

私は咄嗟に感じた風向と殺氣の方角に剣を構え、その瞬間に甲高い金属音が響いて火花が散る。

しつかりと手応えを感じ、剣を握る手が痺れそうになる程の衝撃を受けるが、そのまま後ろに下がり笑みを浮かべる。

「なっ!? 今のさえ防ぐなんて、目では追えない筈の速度を出してたし、タイミングも良かった筈なのに……」

「ええ、とてつもない程洗礼されてたわね。 ほぼ目で追えないし元々の一撃一撃が速度も相まって余計重かつたし、ホントに力の差を感じちゃったわ。」

私は笑みを崩さずに軽口を叩くが、正直相手の殺氣を読めなかつたら確実に殺られた。

それ程まで正確に入れてきていたんだ。 変なところに飛ばされて早々これだけヤバイ奴とやり合うなんて想定外も良いとこよホント。

「な、ならどうして……」

「戦いに於いて、視覚だけが全てじゃないってことよ。」

「え?」

私の問いに、相手は戸惑つたように首を少し傾げる。

「さあ、次は私の番ね?」

そう言い私は反撃に入つて、前進しながら青年へと急接近し始めた。

「はっ!」

彼も我に返つて再び構える。

私は初手で横薙をしようとするが、相手は猛スピードで避けて背後を取り、袈裟斬りを繰り出す。

「読める！ はああああああ！！」

私は相手から斬る瞬間に発せられた殺氣と風の軌道を読んで、背後に居ることを察知し、勢いを乗せたまま跳んで袈裟斬りをギリギリのところで回避する。

「不味い！」

「でりやああああああああああああああ！！！」

剣に蒼い焰を纏わせて、そのまま横薙の勢いを保つたまま回転しながら袈裟斬りを叩き込むように振るう。

「えい」

「ツ？ ガフツ！」

その刃が青年を斬るよりも先に、腹部から来る衝撃と共に胃の中の物が逆流するような感覚に至り私の身体が上へと吹き飛ぶ。

何が起こったのか、必死に頭を働かせて視線を先程まで居たであろう場所へと移すと、そこには白髪の少女が握り拳を作った状態で前に腕を突き出していた光景が目に移っていた。

(ああ……私、あの子に殴られたんだ。)

私は内心で、事の次第を理解して少しでもこうなることを忘れて油断していたことを激しく後悔した。

そう、相手は複数人居るのだ……こうなることなんて誰でも予測出来た筈だつたんだ。

だと言うのに、超人相手にちょっとやり合えた程度で慢心して警戒を怠るなんて、自分もまだまだなど痛感させられてしまった。

そう考へてる内に私の身体は地べたを転がり、吐血してしまう。

「ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！ はあ……はあ……」

私は血を吐き、激痛が走る腹部を抑え痛みを堪えようとするが、全身に走る不快感と腹部から感じる激痛は収まらなかつた。

身体が震えて手から力が抜けそうになるが、私は必死に堪えて剣を逆手に持つて杖代わりに地面に突き刺して立ち上がる。

そして、私を殴った白髪の少女と金髪の青年へと視線を移す。

「祐斗相手に彼処までやり合えて、それで小猫の攻撃にすら耐えるなんて……中々やるじやない。」

赤髪の女性はそう言い、見下ろすように此方を見つめる。

「そりや、はあ……はあ……どうも……ガフッ！ ゴホオツ!?」

「でももうまともに立つのがやつとのようね？」

「そう……みたいね…………正直、油断…………してたわ。」

私はある意味、自分の愚かさに思わず嘲笑してしまう。

途切れ途切れに言葉を紡ぐが、その際に逆流したモノを血と一緒に吐き出してしまふ。

「ああ、ちよつとヤバイかも……」

「大人しくした方が身のためです。」

私の咳きに、白髪の少女がファイティングポーズを取りながらそう答える。

隣の青年も、何時でもやれると言わんばかりに身構えた。

「致し方……無いわね。」

私はポケットからモノメイトを取り出し、それを口に入れて噛み碎いて飲み込む。

「ンンツ……んぶつ……うう……んくつ……」

喉から固形物を通す際に色々と逆流したせいでもう口の中と言い喉と言い、言葉にしようがない程最悪なことになつて吐き出しそうになるがグッと堪えて暫く固まる。

そうして待つこと数秒後、身体から痛みが抜けていく感じがして腹部の不快感も多少ながら緩和されるのが分かつた。

「はあ……はあ……まだ、終わつてなんか……ないわ！」

「これ以上は止めときなさい。このままやり続けたら、貴女……死ぬことになるわよ？」

赤髪の女性から放たれる殺氣と冷徹な眼光が、私の全身を震わす。

「つ……それでも、よ。」

「……そう。朱乃、貴女は二人の援護をお願い。」

「うふふ……腕が鳴りますわね。」

赤髪の女性がそう言うと、黒髪ボニー・テールの女性が微笑んで手を翳す。すると、その掌から紫電が走ったように雷が発生する。

「ツ?! そう言うことね?」

そう言い、私は警戒心を最大限まで上げて前に出た三人に視線を移す。

「祐斗、小猫！」

「はい！」

そして赤髪の女性の言葉と共に白髪の少女と金髪の青年も行動しようとする。

「フツ……上等よ。やつてやろうじゃない！」

私がそう叫んだと同時に、二人が動き始めた。

「悪いけど、やらせて貰うよ!」

金髪の青年はその速度を活かして数回程辺りを動き回つて撓乱させてから私に肉薄し、その手に握られた剣を以て私を切り裂かんと刃を振るう。

「読める！ せやああああ！」

「つ……やはり読まれたか！」

しかし、やはりと言うべきか……殺氣は感じ取れしており、最初ほど驚きはせずに冷静にいなして斬り返しをして相手から距離を置かせる。

流石にもう簡単には通じないと理解したのか、動搖せずに次の一手へと移る。

「えい」

そうしてゐ間に、白髪の少女が間合いを取つてアッパーを繰り出そうとしていた。

流石にそれを喰らえばタダでは済まないと理解していた私は後ろに下がることでアッパーを回避する。

「うわっ!? 空気が震えてる……恐ろしいわね、それ？」

「まだです……吹き飛んでください。」

そう言うと、着地と同時に助走をつけて右ストレートを繰り出してきた。

しかし、威力はヤバそうだが金髪の青年ほど速くはないので普通に避けることは出来た。

「なら、青龍……焰殲霸！」

私はそう叫びながら手に蒼炎を纏い、凧払うようにして纏つた焰を撒き散らして金髪の青年と白髪の少女を囮うように辺り一帯を火の海に変え、白髪の少女の身動きを取りなくする。

そして黒髪ボニー・テールの女性へと視線を移そうとした時、突如真上から轟音が鳴り、私は反射的に後ろへと跳んだ。

すると、先程まで私が居た場所に雷が降り注ぎ、地面に焦げ付いた後が残っていた。

「くつ！ 厄介ねそれ！」

「あらあら、まだまだこんなものではありませんよ？」

そう言うと、何故だか楽しげに片手を上に掲げて追加で雷を落としてきた。

「うわわわわ！？ ちょつ……攻撃をする暇すらないじやない!?」

私は次々と頭上から降り注ぐ雷を避け続け、やがて蒼炎が消えたところで再び二人が動き始めた。

最初に白髪の少女が飛び込んで一気に間合いを取り、ボディーブローを繰り出してくる。

「効かな……ぐつ！？ な、なんて威力！」

私は反射的に剣でその攻撃を防ぐが、余りの威力に後ろに吹き飛んでしまう。なんとか体勢を整えて次の攻撃に備えようとしたその時、僅かに殺気を感じた。

「貰った！」

「ハツ!? 不味つ……ぐあああああつ!?

この殺気の正体を理解した頃には時既に遅し、私は金髪の青年に通り過ぎ様に斬られ、痛みに手から剣が離れてしまう。

「これまでだ！」

「があああああああああああ!?」

追い撃ちを掛けるように青年はそのまま袈裟斬りを繰り出し、それを諸に受けて深手を負つてしまつた。

それにより、全身から駆け巡る激痛と灼熱感に意識を刈り取られそうになり、とてもじゃないがこれ以上戦える状態では無かつた。

私は薄れ行く意識を保つてポケットに手を入れようとしたが、その後に真上から轟音が響いて突如全身から伝わる電流と身を焼かんばかりの灼熱感を覚えたと同時に、私の意識は途絶えてしまつたのだつた。

page 7.5 偽りの少女、紅髪の滅殺姫一行と邂逅する 裏

夜のオカルト研究部の部室にて、赤髪の女性……リース・グレモリーこと私は例の教会へ今一度赴かんと準備を整え、戻ってきた朱乃達に今回することを伝えていた。

「朱乃から大体の話は聞いているでしようけど、今から再度あの墮天使達が拠点として使つていたあの教会へ向かうことにしたわ。」

「例の教会ですか？ 確か以前調べた時は……」

「……何も手掛かり無しでした。」

私の知らせに、祐斗と小猫は以前の教会搜索の結果を思い出す。

私は焦りの余り、最初はかなり早計な判断をしてると理解していながらこうしようと考えてしまつっていた。

しかし、最近人の出入りがあつたと先程密かにとある人物からの通達を受けており、何かあると踏んで今回あの教会の再調査を決行することになつたのである。

「ええ、前回は見つけられなかつた……それはその時にはまだ誰も訪れる者が居なかつたから。」

「……まさか、あの後から誰かが？」

「可能性としては充分あり得るわ。仮にこれが一誠に関係しないものであれ、確かめる必要があるから向かうわよ？」

「「はい。」」

私はそう言つて魔方陣を介して転移し、あの教会へと向かつた。

そして私達は教会前へと辿り着いて、辺りを確認し始める。

妙に物静かで風の音が響く中、暫くして祐斗が突然声を上げた。

「部長！ 誰かいます！」

「あー……えつとお、どちら……様？」

私は祐斗のその呼び掛けに皆が、祐斗の指示した方へ視線を移すと、そこには一人の少女がおり、その少女は気まずそうに何者かと問い合わせて来た。

「貴女こそ、こんな時間に此處で何をしてるのかしら？」

私は冷静さを欠かぬ様そつと何をしてるか問い合わせる。

すると、相手も警戒心を抱きつつ問われた質問に答え始める。
 「私は気付いたら此処の中で眠つて、暫くどうするか悩んだ末に此処を出ようとしてました。」

（気付いたらこの教会に居て此処で留まつてた？ 以前に訪れた時は居なかつた筈……出入りした後も無かつたし、もしや私達が去つた後だとでも言うの？）

私は内心で相手の返した言葉に違和感を感じて思考を繰り返すが、疑念が余りにも多すぎる。

先ず、彼女がどうやつて此処に来たのか……相手は明らかに普通の人間で、周りに誰かが居るわけでもない。

更に言えば彼女の発言を考えるに、誰かに誘拐されたわけでも無いと……いや、單に誘拐した実行犯が今この場に居ないだけかしら？

どちらにしても色々聞かなければならなさそうね。

「そう……貴女、名前は？」

私は流石にどう呼べば良いか分からぬままのも不便だろうと思い、手始めに名前を聞いた。

「私は、メサイア……アルターメサイア。」

「あ、アルター……メサイア?」

そして少女はそう答え、私は少しだけ戸惑つて目を細めてしまう。

凄く失礼ではあるけど、随分と変わった名前ではあった。

とても人に付ける名前とは思えないけど……まあ此処は一旦触れないで置きましょう。

「ゴホンッ! じゃあ、アルターメサイアさん? ここで茶髪の男の子を見掛けなかつたかしら? 貴女と同い年位の子で、名前は兵藤一誠つて言うんだけど……」

「兵藤……一誠? いや、知らない名前ですね。」

そして私は本題に入つて、一誠のことを見聞いた。

すると彼女は少し目を見開いたと思つたら、首を軽く横に振つて知らないと答える。

「そう……」

私は残念そうにして項垂れる。

朱乃が少し心配そうにしているけど、別に落ち込んではいなかつた。

寧ろ、一誠を見つけるチャンスかもしれないと感じてすらいたんだから。

その証拠に項垂れた私を見てほんの僅かだが、彼女のその安堵に満ちた瞳がそれを雄弁に語つている。 そう、彼女は……何かを知つてゐるのだ。

「貴女、何か知つてるわね?」

「ツ!? な、何も知りませんって!」

「あらそう? まあ、どちらにしても身柄は拘束させて貰うわよ? 貴女から何か異様な力を感じるから。」

彼女は必死に知らぬと言うが、私は関係無く拘束すると答える。

實際外れにせよ当たりにせよ、このまま彼女を一人には出来ない。

「また、墮天使? さつき関わって録なことにならなかつたし、関わりたくないから逃げる!」

そう言い、彼女は全速力で走つて逃げようとした。

「それなりに足は速いようだけど……祐斗!」

「はい!」

また……ね、益々逃がしてはならないと感じ、私は逃げていくメサイア視線を外さぬまま祐斗に指示を出して逃げ道を遮らせた。

「うえ!? は、速つ!」

「悪いけど、大人しくしてくれないかな? 出来れば戦いたくはないんだ。」

祐斗は魔剣創造を使用して剣を作つて、既に臨戦態勢に入つてた。

出来れば抵抗して欲しくは無いが、最悪再起不能まで追い込もうと考えもした。

そうこうしてゐる内にメサイアは青い柄と銀色の刃を持つ奇妙な剣を呼び出し、その手

に握り締める。

「それで簡単に降伏する程、私は甘くないわよ？」

「ツ！？ そうか、君も剣を扱うんだね？」

「ええ、我流ではあるけど……剣術を一応身に付けてるの。」

そう言い、頬に流れた汗と共に笑みを浮かべて構えた。

彼女が大人しくする気は無いとこの場の全員が理解して完全に戦闘態勢に入る。

「アーシア、貴女は下がつて見ていて頂戴。」

「は、はい！」

私はアーシアを後ろに下がらせて、メサイアの方を見る。

「こうなつてしまえば、最早話し合いは無理ね……なら実力行使あるのみよ。」

「いざ、勝負!!」

私のその言葉は、アーシア以外には届かず、祐斗とメサイアのその言葉に搔き消される。

そして同時に踏み込むが、やはり祐斗の方が遙かに速かつた。

「はあああ！」

「ぐつ！」

しかしメサイアは祐斗の斬撃を予測してそこに剣を構え、なんと初動の一手を防い

だ。

「今のを防いだ!?」

「てやああ!!」

「つ！」

そしてメサイアも祐斗の剣をいなすように弾いてそのまま横に一閃するが、祐斗は即座に反応してその斬撃を避けた。

「良いスピードだね？」

「アンタの方が数倍も速いっての！」

「それはどうも！ なら、今度はこれだ！」

互いに軽口を叩く中、小猫が私にこう聞いてきた。

「……私も出ますか？」

「いいえ、ここは祐斗に任せましょう？ その上で祐斗が危なくなつたら助けてあげて

？」

「……分かりました。」

そう言うと小猫は臨戦状態のまま、二人を見つめ始めた。

そうこうしてゐる内に祐斗がメサイアの背中を斬り付けていた。

「貫つた！」

「があつ!? ぐつ……ああああああああ!!」

そして痛みに悶えつつも負けじと剣で後ろに一回転して薙ぎ払うが、その動作に遅れが生じていて祐斗は容易に避けることが出来た。
この調子なら祐斗一人でどうにかなりそうね。

「魔物退治? 良く分からぬけど、それなりの場数は踏んでるみたいだね。なら、これはどうかな?!」

私が小さくそう呟くと祐斗は辺りを動き回り始め、メサイアを攪乱させようとする。
相手も祐斗の思惑通り攪乱されて完全に追い切れなくなつており、次の一手で終わるだろうと確信した。

「そこ、貰った!」

そして祐斗がメサイアの死角から狙いを定めて急接近し、そのまま横薙で斬り伏せようとする。

しかし、此処で信じられないことが起きた。

「斬る瞬間の風向と殺氣で予測するまでよ!!」

メサイアはなんと、目にも止まらぬ速さで瞬時に迫った祐斗の振るう剣の届く範囲に突然剣を構えてその斬撃を防いで見せたのだ。

そしその後、メサイアはそのまま後ろに下がつて笑みを浮かべる。

「なつ!? 今のさえ防ぐなんて、目では追えない筈の速度を出してたし、タイミングも良かつた筈なのに……」

「ええ、とてつもない程洗礼されてたわね。 ほほ目で追えないし元々の一撃一撃が速度も相まって余計重かっだし、ホントに力の差を感じちやつたわ。」

メサイアは笑みを崩さずに軽口を叩いて、一方の祐斗はあの一撃を防がれたことに一番驚いていた。

今のは並大抵の悪魔ですら見切るのが困難な筈……ましてや相手は普通の人間なのだからなおのこと厳しい筈だ。 それを見事防いでしまうのだから驚くのも無理はない。

「な、ならどうして……」

「戦いに於いて、視覚だけが全てじゃないってことよ。」「え？」

祐斗の問いに、メサイアはそう答えた。

視覚で捉えることを止めたつて訳？ 私は彼女が何者なのか気になり始めていた。

「さあ、次は私の番ね？」

そう言いメサイアは反撃に入つて、前進しながら祐斗へと急接近し始めた。

「はっ！」

祐斗も我に返つて再び構える。

メサイアは初手で横薙をしようとすると、祐斗は猛スピードで避けて背後を取り、袈裟斬りを繰り出す。

此処で流石に決めると思った予想を覆すように、メサイアが動いた。

「読める！ はあああああ！」

なんと、メサイアは勢いを乗せたまま跳んで袈裟斬りをギリギリのところで回避したのだ。

「つ……小猫！」

「……はい。」

流石に不味いと察した私は、小猫に祐斗を助けるよう伝える。

「不味い！」

「でりやああああああああああああああああああ!!!!」

メサイアは剣に蒼い焰を纏わせて、そのまま横薙の勢いを保つたまま回転しながら祐斗に袈裟斬りを叩き込むように振るう。

祐斗も斬った直後で僅かな隙を晒して一撃を受けそうになつた。

「えい」

「ツ!? ガフツ！」

しかしその刃が祐斗を斬るよりも先に、小猫がメサイアの腹部に強烈なパンチを繰り出して吹き飛ばした。

あの苦し気な様子から、小猫の一撃がかなり効いてるのが分かる。

そしてメサイアの身体は地べたへと落ちて転がる。

「ゲホッ！ ゴホッ！ ゴホッ！ はあ……はあ……」

メサイアは血を吐き、激痛が走る腹部を抑え痛みを堪えようとする。

苦しそうにしながらも倒れること無く剣を逆手に持ち、杖代わりに地面に突き刺して

立ち上がる。

ただ、これで小猫の一撃にも耐えたことになり、彼女の脅威性を嫌でも感じてしまう。

だが、代わりに私の決意も更に確固足るモノとなつた。

「祐斗相手に彼処までやり合えて、それで小猫の攻撃にすら耐えるなんて……中々やるじゃない。」

私はそう言い、メサイアを見下ろすように見つめた。

幾ら耐えたと言え、最早まともに戦うことなんて出来そうにも無いと感じた。

確かに祐斗との一騎討ちなら初見であることも考えてチャンスはあつたかも知れな
いけど、それももうない上に小猫も参加したのだ。

最早彼女に勝ち目など無いだろう。

「そりや、はあ……はあ……どうも……ガフツ！ ゴホオツ!?」

「でももうまともに立つのがやつとのようね？」
「そう……みたいね……正直、油断……してたわ。」

私の問いに、メサイアは嘲笑しながら途切れ途切れに言葉を紡ぐが、その際に逆流し
たモノを血と一緒に吐き出してしまう。

「ああ、ちょっとヤバイかも……」

「大人しくした方が身のためです。」

メサイアの咳きに、小猫がファイティングポーズを取りながらそう答える。

祐斗も、何時でもやれると言わんばかりに身構えた。

「致し方……無いわね。」

そう言うとメサイアはポケットから何かを取り出し、それを口に入れて噛み砕いて飲み込む。

「ンンツ……んぶつ……！ うう……んくつ……！」

「……一体何をしてるのかしら？」

私達全員がメサイアの奇妙な行動に警戒していると、メサイアの身体から傷が少し癒えていくのが分かつた。

……成る程、今飲んだアレは回復薬って訳ね。 しかしそこまで傷が癒えてる訳ではないことも何となくではあるが分かつており、効力は高くないのだと察した。

「はあ……はあ……まだ、終わつてなんか……ないわ！」

「これ以上は止めておきなさい。 このままやり続けたら、貴女……死ぬことになるわよ？」

私は殺氣と圧力を込めた瞳で、彼女を見つめながらそう告げた。

私からの最後の警告でもあり、情けもある。

「つ……それでも、よ。」

しかし、勝てないと彼女でさえ理解出来る筈なのにも関わらず、メサイアの瞳からは闘志が消えておらず、彼女が私の警告に従うこととはなかつた。

「……そう。朱乃、貴女は二人の援護をお願い。」

「うふふ……腕が鳴りますわね。」

私はメサイアのその選択に愚かだと感じつつ、何か確信めいたモノを感じて本気で捕らえるべく、朱乃にも戦闘に参加して貰うこととした。

絶対に彼女は何かを知つており、隠していることがあるとそう感じてしまったのだ。でなければ此処までやつてそれでもなお勝てないと分かつても拒否を繰り返すことも普通はあり得ないのだから。

「ツ!? そう言うことね?」

そう言い、メサイアは警戒心を最大限まで上げて前に出た祐斗達に視線を移す。

「祐斗、小猫!」

「はい!」

そして私の言葉を合図に、祐斗と小猫が動き始める。

「フツ……上等よ。やつてやろうじゃない!」

すると、メサイアもそう叫んで構えた。

「悪いけど、やらせて貰うよ!」

祐斗は目にも止まらぬ速さで数回程辺りを動き回つて攪乱させてからメサイアに肉薄し、その手に握られた剣を振るいメサイアを斬ろうとする。

「読める！ せやああああ！！」

「つ……やはり読まれたか！」

しかし、メサイアは最初より冷静にいなして斬り返しをして祐斗から距離を置かせる。

しかし、祐斗も一度防がれた身……流石にもう驚くこともなく冷静に次の一手へと移つた。

「えい」

そうしてゐる間に、小猫が間合いを取つてアッパーを繰り出そうとしていた。

しかし、メサイアはそれを後ろに下がることで回避する。

「うわっ!? 空気が震えてる……恐ろしいわね、それ？」

「まだです……吹き飛んでください。」

そう言うと、小猫は着地と同時に助走をつけて右ストレートを繰り出したが、それも回避されてしまう。

「なら、青龍……焰殲霸！」

すると、メサイアは突然叫びながら手に蒼炎を纏い、凧払うようにして纏つた焰を撒き散らして祐斗と小猫を囲うように辺り一帯を火の海に変え、二人の身動きを取れなくしてしまつた。

「炎!? まさか、彼女は神器の所有者!?

私は今の蒼炎が神器の力によるものと推測して目を見開いた。

只の人間ではなく、一誠と同様神器の所有者だつたなんて……

「うふふふ……まだまだ行けそうですね? では、こんなのはどうでしょう?」

朱乃はそう言い、手を上に翳して雷を容赦なく落としていくが、不意打ち紛いな落雷だつたにも関わらず、メサイアは反射的に後ろへと跳んでその雷を避けて見せた。

「くつ! 厄介ねそれ!」

「あらあら、まだまだこんなものではありませんよ?」

メサイアが朱乃に向かつてそう言うと、朱乃は楽しげに片手を上に掲げて追加で雷を落とした。

「うわわわわ!? ちよつ……攻撃をする暇すらないじゃない!?

朱乃の容赦無い落雷を必死に避け続け、やがて蒼炎が消えたところで、閉じ込められていた二人が再度動き始めた。

最初に小猫が飛び込んで一気にメサイアの間合いを取り、ボディーブローを繰り出した。

「効かな……ぐつ!? な、なんて威力!」

メサイアは反射的に剣で小猫の攻撃を防ぐが、余りの威力に後ろに吹き飛んでしま

う。

なんとか体勢を整えて次の攻撃に備えようとしたみたいだが……既に祐斗が動いており、必中は確実なものとなつた。

一貫つた！

ハツ！？
不味つ……ぐああああつ！？

そしてその間際にメサイアが漸く察知したが、時既に遅しと言わんばかりに祐斗に通り過ぎ様に斬られた。

これまでだ！」

「がああああああああああ!?」

追い撃ちを掛けるように祐斗はそのままメサイアに袈裟斬りを繰り出し、それを諸に受けて彼女は深手を負うことになり、最早満身創痍だった。

あるとする。

「あらあら……残念ですが、二度目はありませんわよ？」

しかし、朱乃が二度目は無いと言わんばかりにまともに動けないメサイアに何の躊躇も無く雷を落とす。

雷を諸に受けたメサイアは断末魔にも近い悲鳴を上げ、そのまま少し痙攣した後、前のめりに倒れ付した。

「どうやら終わつたようね？」アーシアは祐斗と一緒にその子を連れて先に戻つていて？

「は、はい！」

「部長達はこれからどうなさるんですか？」

「私達はこの教会の地下も含めて色々探らせて貰うわ。」

私は祐斗の問いにそう返してそのまま教会の奥へと入つていき、それに付き添うように小猫と朱乃も着いてきた。

「以前より随分と荒れてるわね？」

「言われてみれば、如何にも此処で誰かと戦闘した跡が幾つもありますわね？」

そう……その教会の中へと入つた私達が見たのは、ボロボロになつた椅子の残骸と大きめのクレーター、そして幾つもの突き刺し跡がある穴等、明らかに普通では付かない傷や跡がかなり見られた。

「もしや此処であのアルターメサイアって子が誰かと戦つていたってこと？」

私はもしかしてと思つてそう呟くが、その場合だと彼女の発言に矛盾が発生してしまったことになる。

あれが仮に本当のことなら彼女が此処ではない何処かから此処に連れてこられている最中かそれよりも前に起こつたと考えるのが妥当……まさか、一誠？ でも今のあの子に此処までの力なんてあつたかしら……？

「……何も見つかりませんでした。」

「何も、なかつたの？」

「はい。」

「……そう。」

私は小猫の報告に肩を竦めそうになるが、それを抑えて朱乃の報告を待つことにした。

そしてそれから暫くすると朱乃が戻ってきたが、その表情からして吉報は無さそうであつたことが分かる。

「周辺に探りを入れて見ましたが、やはり何もありませんでしたわ。」

「もう一度来れば何かあるかと思つたけど……宛が外れてしまつたわね。」

そう言い、私は引き上げようと教会の外へ出ていく。

『兵藤一誠を、お探しかな?』

「「!」」

三人は突如背後から聞こえた声と、発せられた言葉に反応して反射的に後ろへと振り向く。

するとそこには、銀色に煌めく衣と軽鎧の様なモノを纏う男が立つており、鋭い刃物のような瞳が私を捉えていた。

「貴方一体何処から……それに、どうしてその名前を知っているのかしら?」

私は冷静さを保つてそう相手に投げ掛けるが、声が震えてることに気付かれていたのか相手は細く笑う。

「クツクツクツクツ……驚かせてすまないな? まあなんだ、昔のよしみとして警告しに来たのさ。」

「昔の? 生憎貴方と私は初対面な筈だけど、何処かで会ったのかしら?」

「ああ、繰り返されるより以前にこの闇夜の景色の中で、我々は出会っていた……こうしてな?」

「……」

私はこの男が何を言つてゐるのか微塵も理解が出来ず、戸惑いつつも過去の記憶を探つて思い出そうとするが、やはり彼と出会つた形跡がまるでなかつた。

氣味が悪いと感じた私は、捕らえてどう言うことなのか洗いざらい吐かせようとするがその途端に彼の身体が薄くなつていく。

「さて、本題だが……兵藤一誠はもうお前達の元へは戻らない。しかし、このまま放置すればこの世界は滅びるだろう。」

「……なんですって？」

その瞬間、頭に血が昇る感覚に至つて目を細めて男を睨む。

声色も自然と怒氣を放つており、怒りが火山のように溢れ出した。

大切な下僕が帰つてこない？ 世界を滅ぼす？ 何を言うかと思えば……

「ふざけるのも大概にしておきなさい？ 悪ふざけだつたとしても面白くもなんともないわよ？」

私は込み上げた怒りと殺意を必死に抑えながらそう警告する。

しかし相手は表情を変えぬまま、寧ろ嗤つて見せた。

「フハハハハ……受け入れ難い話だろう。しかし、どのみちもう取り返しが付かないとここまで進んでいる。 兵藤_彼一誠の事など忘れた方が身のためだぞ？ リアス……」

そう言うと、その男は笑みを浮かべたまま消えてしまい、その場を沈黙と風に揺られ

る草地の靡く音だけが耳に入つて来る。

「……戻るわよ。」

「え、ええ……」

「……はい。」

私は不愉快極まりないあの男の発言への激情を抑えたまま二人にそう告げ、魔方陣を展開して部室へと戻るのだつた。

これから始まろうとしてることに、私達はまだ気付かず……

page 8 偽りの少女、悪魔を知る

意識を無くしてどれ程経ったのか……最早時間の感覚すら薄れていきたただ暗く何もない空間を見せられ続けていた。

身体が動かせない……と言うよりかは身体の感覚が全く無いに等しい状態だった。そうして暫くすると突然暗がりから光が照らされ、暗い闇を包み込むようにして空間が広がり、気づけば肉体の感覚も戻つて動かせるようになっていた。

「あれ? でもなんか小さくなってる?」

私は自身の身体や、身に付けてる服装に違和感を覚えてしまう。

その理由と言うのが、先ず身長が異様に低いこと、そして武器もなにもなく、服装も何時もの制服とは異なるモノを着込んでいたからであり、声もやけに幼く感じてしまつていた。

何がどうなつてゐるのかと、私は思考を巡らせていると手前の方から草を踏むような足音が聞こえ、その方向から物語にでも出ていそうな金髪の少女が出てきた。

「ん? ああ、起きてたんですね? メサイア。」

少女が自身の名前を口にしてニッコリと優しげに微笑む。

そんな少女を見た私は、何故だか懐かしいような感覚に至ってしまい、そのまま少女を見て呆然としていた。

「あれ？ おーいメサイア～？」

「……ハツ!? え、あつ……き、聞こえてるよ？」

少女が再度名前を呼びつつ目の前で掌を振るうと、我に返つて私も少女の言葉に応答する。

「うーん、起きたばかりで寝惚けてるんでしようか……あつちでとりあえず顔洗つて来ると良いですよ？」

「う、うん……」

そう言い少女が指差した先には川が流れしており、私はとりあえずその川へ向かつた。

そうして川に着いた私は流れ行く水流から両手で水を汲み、そのまま顔にその水を浸けて両手で洗つていく。

「……ふう。」

一先ず洗い終えて少女の元へ戻ると、既に草地に腰を下ろして本を手に此方に手招きをする。

「此方ですよ～メサイア。」

「あの、失礼ですが……どなたですか？ どうして私のことを？」

「どうしてつて……どうしても何も、貴女の教育係を任されてるんですし知つて当然ですよ。名前もあんなに教えたのに、覚えて貰えないって悲しいですね」

「えっ、あの……ごめんなさい。」

少女の悲しげな笑みを見て頭を下げて謝つてしまふ。

どうしてだか、彼女のことを考えようとすると靄が掛かつたかのように何も思い出せず録に思考を巡らせられなかつた。

「今度はちゃんと忘れないでくださいね？ 私は縷「綢オ縷ソ綿シ綿サ縷「綢エ縷ケ
……」

「え？」

そして少女が名前を口にする瞬間にノイズが走り、聞き取れずにそのまま視界が暗転してしまう。

そうして暫くして何か光を感じてゆっくりと目を開けると見知らぬ天井が見えた。
「……あれ？ ここ……は？」

目を開けて上半身をそつと起こし、辺りを見渡すとそこは何処か教室の様な部屋にソファーやテーブルがあつた。

夢で覚めれば見覚えのない屋敷、夢から覚めても見覚えのない天井と部屋……私はいい加減クラツド6の自室が恋しくなつてくる程に色々と疲弊していた。

結局あれも夢オチで内容も良く分からなくて、知らない少女と話して……

「あら、もう目覚めたのね？」

「ツ！」

そんな風に考えてた矢先、突然背後から声が聞こえて気配を感じ、瞬間的に振り向いた。

すると、そこには意識を失う前に相対した悪魔の親玉とも言える赤髪の女性がソファーに座っていた。

「身体の具合はどう？ 何処か可笑しな感じとかはない？」

「な、無いですけど……」

私は警戒しながらも、赤髪の女性の質問にそう返した。

「そう、それは良かつたわ。」

「……此処は何処なんですか？ どうして私は生きてるんです？」

私は、ふと赤髪の女性にそう聞いてみた。

「此処は駒王学園の旧校舎にあるオカルト研究部の部室よ。 言つたでしよう？ 身柄

を拘束させて貰うつて……今の貴女は私達からすれば怪しい存在なの。」

そして赤髪の女性はそう答えたと同時に扉が突然開き、そこから見たことのある金髪の青年が姿を現す。

「つ!?

「あつ……もう目覚めてたんだね? 傷の方は大丈夫?」

「ま、まあ……そ、う言え、ば気になつてたんですが、割と致命傷つて位の傷を負つてた筈なのに、ほほ完治して、るみたいで……どうやつて治したんす?」

「あーそれは……」

「只今戻りましたー!」

金髪の青年が、そう言いかけた所で、その後ろから金髪の少女が出てきた。

「お帰りなさい、アーシア。」

「え、えつと……貴女は?」

「ふえ? あ、目が覚めたんですね? 良かつたです! 私はアーシア、アーシア・アルジエントと言います。」

金髪の少女……アーシアは私に詰め寄り、安堵の笑みを浮かべながら、そう語り、その勢いに乗せられて私は戸惑ってしまう。

「丁度良いわね? とりあえず紹介だけしておくれ。」

そう言い、赤髪の女性がソファーから立ち上がり胸に手を当て私の目を見る。

「私はリアス・グレモリー。この街の管理と監視をしているオカルト研究部の部長よ?」

「え、えっと……」

そう言い、赤髪の女性……リアスさんはそう答え、私は色々と情報量の多さに戸惑つてしまふ。

「僕は木場祐斗。このオカルト研究部の部員で、知つての通り剣を扱つているんだ。そして……」

「……搭城小猫です。宜しくお願ひします」

金髪の青年……木場さんと白髪の少女もとい搭城さんがそれぞれ自己紹介を始めて名前を把握していると、紅茶の香りが漂うのを感じた。

「お茶をどうぞ。」

「え？ あつ、どうも……」

そしてティーカップを差し出され、私はその方に視線を向けお礼を言う。

するとティーカップを手渡してきたのはあの黒髪ボニーテールの女性だつたことに気付いた。

「あつ……貴女は確かあの雷使いの……」

「あらあら、覚えてくださったのですね？ 私は姫島朱乃と言いますわ。以後、お見知り置きを……」

「は、はい……あつ、美味しい。」

私は黒髪。ボニー・テールの女性……姫島さんの紹介に軽く頷いて紅茶を一口飲む。

……美味しくて思わず声に出すと、姫島さんが嬉しそうに微笑む。

「うふふふ……お口に合つたようでなによりです。」

「ゴホンッ！　じゃあ起きたばかりで悪いけど、本題に入らせて貰うわね？」

姫島さんが微笑んでる中、紅茶をそつと少しずつ飲んでいると、リアスさんが咳払いをして本題に入った。

「……兵藤一誠に関する情報を、教えて頂戴。」

「つ……！」

私はそう来ることを察してまだ飲みかけのティーカップをそつとテーブルに置いて俯く。

「私は何も……」

「じゃあどうして逃げたの？」

「そ、それは……人じやないのに拉致られたら何されるか分からなかつたから……」

「……」

私は必死に逃げ道を探すも、全員が此方を凝視して真顔を決め込む。

視線がとても痛く、居たまんなくなってしまう……でも、兵藤さんのあの言葉を思い出しても悪足掻きしようと黙秘を貫いていると、沈黙を破るように木場さんが口を開い

た。

「アルターメサイアさん、出来れば本当のことと言つて欲しい。彼は僕達の仲間なんだ。」

「変態ですが同じ眷属である以上探さないわけには行かないのです。」

木場さんの言葉に続くように、搭城さんも言葉を紡ぐ。

口から溢れた言葉とは裏腹に、どこか悲しそうにしていた。

「可愛い後輩の行方を少しでも知りたいんです。ですから、余り下手な嘘は吐かない方が宜しいかと……」

「お願いです……知つてることを、教えて下さい!!」

「つ……！」

二人に続いて、姫島さんとアーシアさんも各々がそう語る。

二人とも目が本気で、特に姫島さんが雷出しそうな位の重圧を感じ、逆にアーシアさんは、素で彼に関する情報を懇願してるようにも見えた。

「一誠さんにずっと助けられてばかりで、それなのにまだ私は一誠の為に何もしてあげられなくて……私も、一誠さんのために出来ることをしたい！もし彼が今、私達の知らないところで苦しんでるのなら、少しでも……その悲しみも、苦しみも、癒したいんです！」

アーシアさんが詰め寄るようにそう告白し、私はそこで彼の言葉をまた思い出してしまった。

『……元眷属さ、今の俺は恐らくははぐれ悪魔のなんだろうがな。』

その言葉が脳裏に過った時、更に彼の目的が楽園の創造であることを思い出し、一つの仮説を立てた。

その楽園創造が先ず本格的で且つ、それなりの規模があるものであること……そして、その計画を遂行するのに眷属のままでいることが不都合であると考えるなら、恐らくあり得ないなんてことは無いだろう。

現に彼は墮天使や見知らぬ人と一緒に居た。

ただ、そもそもとして何故兵藤さんは楽園創造を遂行しようとしてるのか？

これだけ仲間内からも大切にされてるのにそんなことをする必要性やメリットが果たして彼にあるのだろうか？ それとも、彼女達とは別の何かが絡んでいる？

じゃあその何かとは何なのか……考えれば考える程謎が増える一方で答えが出てこない。

「お願い……教えて。 一誠は何処……？」

そう考えていると、リアスさんはそう言つて私に詰め寄つて來た。

平常そうな声色とは裏腹に、焦燥していることが何となくではあるが分かつた。

「つ……」

「もしその情報を提供して命を狙われると言うのなら、私が責任を持つて貴女を保護するわ！だから……だから、お願ひよ。知つてることを、教えて……」

「つ……！」

そして続け様にそう言葉を紡ぎ、気付けばリアスさんの瞳から涙が溢れ、頬を伝つて溢れ落ちた。

それを見た私はズキンと、心が痛むようなそんな感じがした。

良心が痛む様な感覚に苛まれて話しそうになつてしまふが……それでも私は約束を守るべく黙秘を貫く。

そうしてリアス達は一向に口を開こうとしない私の対応にどうするかと考えている
と……

『ご機嫌よう……残酷な現実と絶望が渦巻く世界に住む迷える人間達よ。』
……突如如何処からともなく低い男性の声が聞こえたのだつた。